

祐子は驚いた。どうして自分の名前を知っているのか不思議でならなかった。しかし、ただ黙って頷いた。

「あなた、特別。他の者と違うことしてもらおう。沢山の男働いている。女たち、子供守る。あなた、男慰める。女慰める。父の奴隷」

祐子は感情の流れをかわして婦人を見つめ、頷いた。

「今夜、きれいな部屋。あした、みんなと同じ。ずっと、みんなと同じ」

賢たちがムンバイに着いたのは夜の8時過ぎだった。直行便が無く、福岡空港を経由した為に13時間も掛かった。賢は亜希子と、梓は康介と同じホテルに宿泊することにした。翌朝の便で、カルカッタに向かうことになっていた。計画の実行は2日後である。賢は康介から「計画は全て予定通りに進んでいる」という報告を受けていた。成田空港で賢はアブリジ・ブリクロンに現金100万円の入った封筒を渡した。この段階で計画は実践段階に移った。もう、後戻りできない。賢は出発前に梓に対し、全てが終了するまでムンバイに留まり、康介と共に行動してもらうように頼んだ。梓は躊躇無く承知した。計画の完了後、お互いに連絡を取り合って、祐子を助け出せたかどうかに関わらず、二つのグループがそれぞれできるだけ早くデリーへ移動することとした。既に5人分の帰りのオープン航空券の用意も出来ていた。亜希子は常に賢と共に行動することとなった。亜希子は賢達の足手惑いになることを懸念していたが、逆に賢はカルカッタに着いた後、祐子をどのように探しているのか具体的なイメージが掴めず、亜希子の透視能力を頼りにしていた。ムンバイでの今後の計画については別のホテルに宿泊している有能なふたりがいることで、非常に心強く感じていた。賢達の泊まったムンバイのホテルは空港の近くで、食事もある普通の洋風バイキングだった為、何の不自由もなかった。翌朝のフライトは8時55分発で11時にはカルカッタの空港に着いた。ムンバイではちらほら見かけた日本人の姿もここではほとんど目にしない。ふたりは昼丁度にホテルに到着した。出発前にホテルの予約はしてあったが、到着時間が早かったので、ふたりは手荷物をベルサービスに預けて食事を摂ることにした。日本との時差が3

時間半ある所為かそれほど眠気を感じない。リスクを避けるためホテルから外に出ることはやめた。ふたりは2日間、ホテルの中かごく近辺にだけ留まることにした。食事も食あたりのことを考えてできる限り洋食を摂ることに決めた。

「あなた、明日は何時ころなのかしら」

「うん、10時頃とのことだけど、恐らく予定通りには行かないと思う。人を排除するか、人のいないときにやらなくてはならないし、事前に覚られてもまずい。運び屋に現場を見せる必要もある。おまけに6箇所同時というのが、かなり難しい。多分、時間的なズレが生じてしまうだろう。そのズレが大きいと、厳戒態勢を敷かれて、身動きできなくなってしまうからな。速攻でやるしかない。幸運を祈ろう」

ホテルの中は、ビジネスマンと思われる人々が目立った。最近のインドの経済発展は目覚ましいものがある。日本の都市と比較しても、その活気は明らかだ。こんな人の動きのある場所での計画はかなり難しいだろうと思ったが、そう思うことで、計画が失敗する可能性を高めてしまうことを懸念し、賢は意識のビジョンを祐子が助け出される場面に切り替えた。レストランを出ると、まだチェックインタイム前だったがホテルの部屋に入ることを許可された。二人の部屋は5階の隣合った部屋だった。それほど高級感のする部屋ではなかったが、特に不便をきたすようなこともなさそうだった。賢は先ず会社に連絡を入れ、ホテルの電話番号を伝えた。それから直ぐに康介に電話を掛けた。

「もしもし、鹿島です」

「内観です。漸くホテルの部屋に入れました。僕はほとんどこの部屋に居ます。計画が終わるまでは部屋を出ないつもりです。何かあったら、いつでも連絡してください。」

「はい、こっちもそうします」

「田辺さんはどうしていますか？」

「彼女はさっき、何かを調べるとか言ってホテルを出て行きましたよ。夕方には帰るって」

「大丈夫かな？」

「何かあったら、電話しますよ」

「明日は連絡を待てばいいんですね」

「そのはずっすよ。もう運び屋は捕らえたって連絡が入ってますよ。明日は10時までにチェックアウトしてロビーで待っててください。そっちにはブリクロンさんが行くはずっす。こっちはチダピオンさんが来ることになってます」

賢は電話を切ると直ぐにシャワーを浴びた。インドに着いてからずっと体全体が汗ばんだ状態で気持ちが悪かった。久し振りに体が清潔になった感じがした。バスルームから出て少しすると亜希子がやって来た。

「シャワーをいただいたら、すっきり致しました。あなたも、汗をお流しになりましたか？」

「うん、今出てきたところだよ。さっき、康介さんに電話したよ。明日は朝の10時までにチェックアウトすることになったから、1時間前の9時にしようか？早まることもあるかもしれないしな」

「はい、早めのほうがよろしいと思います」

「祐子と一緒にになったら、兎に角、最短時間で日本に戻ろう。ここを何時に出れるかがポイントだ。1時50分か2時の便に乗れば、デリー発の夜7時の便に乗れる。そうすれば翌朝7時半に日本に着く。多分、それが最短だな。彼らが約束どおりに祐子を連れて来てくれれば、明日中に日本に向けて出発できる可能性が高い。もちろん満席だったら駄目だけどな」

「大丈夫と信じます。帰りは祐子お姉さまと一緒に帰れることを確信しています」

「今日の夕食と、明日の朝食はこの部屋で摂ろう。できるだけこの部屋から出たくない」

「はい、わたくしもそのつもりです。先ほど家にも電話を入れましたので、今日はまだ連絡する必要は無いと思います」

ふたりは祐子の意識を探してみることにした。ベッドの上に腰掛けて亜希子は瞑想状態に入った。暫らく瞑想していたが、やがて亜希子は捕えた情景を説明し始めた。

「大勢の人が居ます。壁にくっつく様に上下に重なっているようです。あまり広い場所じゃありません。7、8人居ます。みんな横になっているようです。女の人たちのようです。眠っている人も居ます。そうです、どうやらベッドに寝ているようです。重なって見えるのは、2段ベッドのようです。全部で4つあるようです。ドアがあります。誰も動きません。一人ベッドから起き上がりました。ドアの反対側の突き当たりの壁に向かっています。壁を覗き込んでいます。小さな机のようなものがあります。そうです、化粧しているようです。少しして、その人はまた、元の場所に戻りました。また、誰も動かなくなりました。・・・」

「何処なんだろう、祐子はその所に居るのだろうか？」

「何となく、祐子お姉さまの意識のようなものを感じます。ここにいらっしゃるのかもしれない」

亜希子は暫らくの間透視を続けたが、情景がほとんど変化無く、その部屋の外側に意識を移すことができなかつたので暫く休止することにした。ふたりは翌日に備え、休息を取ることにした。亜希子は自分の部屋には戻らず、賢と一緒にベッドに横になった。賢の横に居ることで、祐子を失った悲しみを少しでも和らげることができると考えていた。

「あなた、祐子お姉さまが戻ったら、3人で信州に行きませんか？お正月に行けなかつたでしょう。祐子お姉さま、とても寂しそうでしたわ。もちろんわたくしも寂しかったですが、祐子お姉さまには、本当に心を開いて甘えることのできる人が、あなたしかいらっしゃらないのですもの。あなたが、段々遠くに行ってしまうと祐子お姉さまは仰っていました。あなたは、全ての人に普遍の愛をお示しになられているのだと思いますが、それは女には辛いことなのです。女にとっては一人の男と結ばれて、その人の子供を産み、愛に溢れた家庭を作るのが夢なのです。自分の愛する男に、近くに居て自分と家族を守っていて欲しいのです。だから、あなたがどなたとも結婚なさらないとおっしゃったとき、祐子お姉さまもわたくしも、胸に大きな穴が開いたようにとっても空しい気持ちになったのです。わたくしは、祐子お姉さまが九州に転勤になるのを直ぐにお受けになったのは、そのやりきれない気持ちをどうにか

したかったのだと思います。心の奥で、万が一窮地に陥れば、必ずあなたが助けに来てくれると信じていたかったのだと思います。わたくしもあなたへの愛は誰にも負けない自信がありますが、祐子お姉さまの愛は、自分の身を捨てても、あなたの元に辿り着きたいという、凄まじい愛のような気がします。わたくしもあなたのことを愛しつづけて・・・・・・・・・・」

亜希子は眠りに落ちた。賢は眠気の中で亜希子の話を聴いていたが、祐子の心の動きを思い自責の念が湧いてきた。自分は「愛は、意識に繋がっている心の作用だ」と考えていたふしがある。しかし、愛は心の作用なのではなく、心に影響を与える自己の核の状態なのではないかと思えてきた。愛は思考では捕らえられないのだと思った。だから愛する人に対してさえ憎んだり、恨んだり、妬んだり、執着を抱いたり、食欲になったりすることができるのだと思った。愛と人への思いやりの心が結びつくとき慈悲が生まれ、それが人間の本来の存在つまりは神に近づく道なのだ分った。そう分かってくると、自分の祐子に対する愛は、決して深いものではなかったと気付いた。祐子の自分に対する愛は、亜希子が凄まじいと言うほど強かった。その愛が、賢を失った今、多くの人に向いているのだと思えた。愛について頭の中を駆け巡る思考を見つめると、自分の意識に対して働きかけて来る意識を感じ始めた。由美だった。テレパシーで語り掛けてきていた。

「あなた、わたしとあなたは意識を共有しているのよ。わたしのできることはあなたにもできるはずよ。人の心が読めるし、過去を見ることもできるし、透視も、遠隔移動もできるはずよ。その能力を使って祐子さんを探したらいいわ」

まさに、晴天の霹靂だった。賢は自分が3次元時空間に捕らわれ過ぎていたことに気付いた。祐子がいなくなったことは、3次元的事象のほずで、本質が変化した訳ではなかったのだ。亜希子と由美がそのことに気付かせてくれた。賢は由美にテレパシーを返した。

「由美、ありがとう。最近、現象界の中での思考しかしていなく、その上、祐子が誘拐された衝撃で自分を狭い枠の中に押し込んでしまってい

た。自分がこの現象界に限定された存在でないことを思い出させてくれて本当にありがとう」

「あなた、気付いてくれてよかった。愛しているわ。おやすみなさい」  
まだ寝る時間ではなかったが、ベッドで休息を取ろうとしていたのを、由美が知っているのだと思った。

「おやすみ」

賢は暫らくの間、意識を働かせたままで休息をとることにした。

賢は亜希子が目を覚ましたとき、一緒に起き上がった。4時間が経過していた。ふたりは夕食を摂ることにした。電話で食事を注文した。選択できるのは3種類だった。チキンカレーあるいは野菜カレーをメインにしたインドの食事かまたはパンと魚のフライベースの西洋風料理の何れかだった。ふたりは西洋風料理を頼んだ。テレビを点けてみた。英語の放送が2局あったが、いずれもドキュメンタリー的な番組を放送していた。少しして電話が掛かってきた。香川からだった。

「香川さんですか？ どうしてここが分ったのですか？」

「ええ、本社の楠木さんに聞きました。内観さん、小山田社長が逮捕されましたよ。お嬢様の誘拐を依頼した後で、台湾に逃げていたようですが、福岡空港に戻って来たところを、モニタージュを覗いて入国者をチェックしていた保安警官が見つke、その場で逮捕したんです。罪状は外国為替法違反とインサイダー取引ですけど、それは別件逮捕で、本当の目的は婦女誘拐罪の適用で彼の関係している人身売買組織を一網打尽にすることです。警察は何とか小山田に白状させようとするでしょう。これでお嬢様を誘拐した者の足取りがはっきりしますが、この誘拐は途中で次々に別の組織にリレーされているようですから、解明はそう簡単ではないと思います。内観さん、実は昨日の夜から、日本ではお嬢様が大変な評判になっているんですよ。お嬢様を誘拐して運搬していた漁船と一緒に幽閉されていた女性たちの証言が、昨日週刊誌とテレビ局のドキュメンタリー番組で暴露されたんです。その中で、お嬢様のとられた行動が視聴者に感動を与えたのです。視聴者の中にはテレビ局や出版社への問い合わせだけじゃ足りなくて、警察にまで問い合わせする人まで現

われて来ています」

「あの、ゆうこ姉さんという女性が証言したのですか？」

「はい、彼女もそうですが、他にも4人の女性が自分自身のことが知れ渡るのも省みないで、自ら進んでインタビューに答えたんです。それも素顔を出してですよ。僕もドキュメンタリーを観ましたが、涙が流れました。本当にお嬢様は神様のような方です。内観さん、お嬢様を絶対に助け出してください。よろしく願いいたします」

テレビ放送は午後9時からCBAの日曜特番という番組で放送された。それは興奮したキャスターの言葉で始まった。

「21世紀の日本にまだ、こんなことが行われていたということ、視聴者の皆さんは果たして信じることができるでしょうか？女性を誘拐して海外で売る。人身売買が行われていたのです。今日はその衝撃的な事実を視聴者の皆様にお伝えいたします」

その後、事件がどのように発覚したのか、誘拐犯がどのような経緯でこのような犯罪を行うに至ったのかの推測、誘拐漁船の逮捕に至るまでの経緯の説明があり、続いてゲストの紹介の後に5人の被害者の紹介があった。

「視聴者の皆様に、実際に誘拐された方々の生の声をお聴きしていただく為に、今日は誘拐された5名の女性の方々に特別にお願いして、こちらにお越しいただいております」

5人は一切マスキングはせず、素顔で出演していた。それは本人たちの希望だとキャスターが説明した。ゆうこ姉さんと山猫、ラッコ、死に掛けた女ともう一人の女性の5人だった。

「大変辛い思いをされたこととお察しいたしますが、無事救出されたことをお喜び申し上げます。さて、現在の心境をお一人ずつお伺いしてもよろしいでしょうか？ よろしければ先ずこちらの方からお願い致します」

キャスターがラッコの方を向いて言うと、ラッコが話し始めた。

「わたしは皆さんに助けていただいたことに感謝しています。でも、わ

たしは、それ以上に誘拐されたこと自体に感謝をしています」

キャスターが変な顔をした。

「えっ？何と仰いました？誘拐されたことに感謝していらっしゃる？」

「はい、わたしは誘拐されたおかげで、女神様のお姿を拝見できました」

「えっ？女神様ですか？」

「はい、わたしは女神様を拝見して、直接教えを受けることができましたので、こんな幸せなことはありません」

「具体的にお話していただけますか？」

「はい、あの方はご自分の身を犠牲にして、あの地獄を天国に変え、わたしたちをお救いになり、わたしたちに希望を抱かせて、ご自身はもっと過酷な地獄に向かって往かれました」

「それは、犯人グループがヘリコプターで連れ去った藤代祐子さんと岸田春子さんの事ですか？」

「祐子お姉さまのことです」

ラッコは祐子が誘拐漁船の中で行ったことを詳しく説明した。時々涙を流し言葉に詰まった。出席していたほかの4人もそのときの状況を思い出したのか、ハンカチを取り出して涙を拭っていた。ゲストとして出席していた8人もてんでに皆涙を拭っていた。次にゆうこ姉さんが話した。

「今、鈴木さんが話したから、わたしは自分の経験だけを話します。わたしもあの方に命を救われました。馬鹿なわたしは、あの方がご自分のどん底の苦しみの中で、ご自分を捨てて生きる道を選ばれ、ご自分の姿に大笑いをされたのを誤解して、あの方に酷いことをしました。あの方に意地悪をし、あの方の顔を2度も足蹴りしました。あの方は一時気を失われました。それほどわたしは酷くあの方を傷つけたのです。それを見兼ねた方がわたしを懲らしめました。わたしは腹を蹴られ、拳固で頬を殴られほとんど気を失いかけていて、そのうえ更に攻撃を受けそうになったとき、あの方が意識を取り戻されわたしに攻撃を仕掛けている方からわたしを守ってくださったのです。あの方は、自分を殴るようにおっしゃいました。泣いて頼んでくれました。もしわたしがあれ以上攻撃を受けていたら、命も危なかったと思います。もう、わたしは駄目だと



感じていたのです。誰も止めに入れないのに、あの方は自分の身を省みず、ご自分をいじめ苦しめたこんな悪い女を救ってくださったのです。あの方が女神様でなければ、他に女神様なんていません。もしどなたかあの方を救ってくださるのなら、代わりにわたしの命を差し上げて構いません」

8人のゲストは何も話さずに真剣に話を聴いていた。次に山猫が話をした。

「わたしも今話した土屋さんと、自分たちの身を守る為に徒党を組みました。あの閉鎖された船底で生き抜くためには、人を押し退けてでも何とか自己主張をするしかないと思死でした。そんな時、あそこに連れてこられたのが、祐子お姉さまなのです。あの方は天使です。菩薩様です。わたしたちが怖がってできなかったことを、全てやってくくださったのです。わたしたちに勇気を持って生き抜くようにお話してくださいました。そして、ご自分は次の苦しみの中に身を投げ入れられたのです。わたしはあの悪党の親分が鉈を手にして、わたしたちを守る為にご自分の身をお捨てになろうとされている祐子お姉さまの左手を切り落とそうとしたとき、恐怖と緊張で気を失いそうになりました。でも、祐子お姉さまは、覚悟をお決めになって、目を瞑られ、悪党が鉈を振り下ろすのを待っておられたのです。あれを観たとき、わたしは、この方が女神様でなくて、誰が女神様だろうと思いました。できることなら、一生この方の元で生きてゆきたいと思いました。誰かあの方を救ってください。助けてください」

山猫は泣きながら話した。ゲストの内の何人かが涙を拭いた。次に鷺窪浪子という名の女性が話した。この女性は船底では壁の隅でじっと身を潜めていた。しかし、祐子の姿が黄金色に輝いているのを観ていて、祐子がみんなの為に身を犠牲にしようとしているときは眩しくて目を開いていられなかったと言った。神様のご光臨に違いないと感じたと言った。ゲストの中に霊能者を自称する女性が居たが、その女性が、祐子は今回助け出された女性たちを救い出すことを使命として、天から送られた天使で、彼女の魂は菩薩界にあると、抽象的な解説をした。ゲストは

納得したように頷いていた。最後に死に掛けた女、有泉理恵が話しをした。

「わたしはお話をさせていただく前に、皆様にお願いがございます。皆様に、どうかあの祐子お姉さまをお救いいただけるように、神様をお願いしていただきたいと思うのです。皆様の祈りが強ければ、必ず祐子お姉さまは助かると思います。お願いいたします。いいえ、祐子お姉さま自身が女神様ですから、女神様のその上の親神様をお願いして頂きたいのです。あの方が、この世界におられなくなったら、わたしは生きておれません。わたしは一度あの船底で死にました。周りに居た人たちに後で聞きました。わたしは息もしていなかったし、心臓も止まっていたと。わたしは、暗いトンネルのようなところを抜けて、広いお花畑の広がる場所に一人で立っていました。すると、一人の純白の服を召した美しいお姿の天使様が天から降りて来て、わたしに「戻りなさい。あなたはまだこちらに来てはいけません。しっかり生き抜きなさい」とおっしゃったのです。祐子お姉さまに触れられたとき、わたしの心臓は再び動き始めたのです。祐子お姉さまは裸になられて、わたしの体を温め、わたしに口移しでお湯をお与えくださいました。わたしが目を開くと、そこにおられたのは紛れもなく、その天子様だったのです。祐子お姉さまだったのです。一度死んだものを生き返らせることがおできになるのは、神様以外に無いのではないのでしょうか？イエス様と同じです。あの方がわたしたちに生きなさいとおっしゃってから、間もなくわたしたちは救出されました。今もあの方のお姿を思い出すと、ありがたくて涙が滝のように流れ出して来ます。わたしは生まれてきてよかったと思います。あの方にお会いできたのですから。そして、あの方の唇に触れることができたのですから、わたしほど幸せな人間は他に居ないと思います」

有泉理恵は涙を流しながら話し、話し終えてもずっと泣いていた。ゲストは全員涙を流した。自称霊能者も言葉を失って、分らないように涙を拭っていた。有泉理恵の話の後で、ゲストのディスカッションがあったが、ゲストの話す言葉は、あまりにも軽すぎて、キャスターも直ぐに話を祐子のこれまでの生きて来た道の説明に移した。それは非常に美化さ

れたものだった。

この放送を原も愛子も見た。ゆきも由美も見た。最も打撃を受けたのは橘だった。自分の侵した罪の大きさに恐れおののいた。

放送が終わると放送局には電話が殺到した。放送局は一時、全ての受話器を受信拒否モードに切り替えざるを得なくなった。

香川の話をお聴いて、賢は亜希子にその話をした。亜希子は左手の甲で涙を拭いながら言った。

「祐子お姉さまの優しさは、普通の人の優しさじゃないんです。そのことはわたしが一番良く知っています。お姉さまの優しさは、その時は理解できないと思います。永遠の視点に立って、相手を見ていらっしゃるのです。だから、お姉さまに接した方はだれでも、後で、お姉さまのことを女神様のように感じるのです」

賢は、祐子が自分の本来の姿を顕わして生きているんだと思った。それは人間の真実の姿なのだと思った。また、電話が鳴った。登紀子からだった。亜希子が部屋に居ないので、賢の部屋に居ないかと聞いていた。賢は「ここに居ます」と応えて、受話器を亜希子に渡した。亜希子は真剣な顔をして登紀子の話を聴いていた。受話器を置くと、賢に言った。

「父が国際探偵社に祐子お姉さまの捜索を依頼したとのこと。これは警察や東領製作所とは関係なく、藤代家としての捜索だそうです。どうして、今になって捜索を依頼するのかしら？」

賢はそれには応えなかった。ルームサービスのボーイが夕食を運んで来た。ふたりは窓際のテーブルで夕食を摂った。テーブルが少し狭かったが、亜希子はこういう形でふたりきりで食事することに喜びを感じた。30分足らずで食事を済ますと、亜希子は食器類を部屋の外に出した。ふたりは暫らくカウチに腰掛けて窓の外の景色を眺めていたが、亜希子がもう一度透視を試みることにした。賢は自分にも透視や遠隔移動の能力が使えるはずだと言っていた由美の言葉を思い出し、亜希子と一緒に透視を試みることにした。しかし、鹿児島と同じ過ちは犯しなくなかった。一人ずつやってみることにした。まず、亜希子が透視を試みた。亜

希子の目にはハーレムの光景が見えてきた。沢山の女性が水着姿のようなスタイルで座ったり、踊ったりしていた。その中に祐子の姿が現われて、直ぐに映像が見えなくなった。一瞬だったが、祐子も他の女性たちと同じような服装をしていたと亜希子は言った。その後は、もう祐子の意識を捉えることはできなくなった。賢が瞑想をし、意識を次第に祐子に向けてゆくと、あの由美の意識に繋がったときと同じ様な状態になってきた。祐子の意識が自分に向いているのが分った。途端に衝撃を受けた。突き倒されるような感覚だった。そして、何かが迫ってくる感覚がした。ひとりの下腹の出た裸の男が目まぐるしく動き回っているようだ。その内、その男が押し掛かってくるような感覚がした。暫らくの間その状態が続いたが、やがて男は憤りを発しながら遠ざかっていった。そこは寝室のようだった。ベッドの上に寝そべっている感覚がする。上方にはレースの掛けられた覆いがある。その覆いの下に寝ているようだった。少しして、今度は部屋の中全体が見渡せるような感覚になった。ドアがある。そのドアが急に開いて、誰か人が入って来た。そしていきなり、衝撃を受けた。それから、賢は意識で祐子を捕らえられなくなった。しかし、たとえ苦境にあるとは言え、祐子が生きていることは確かなようだ。賢は直ぐに亜希子に自分の見た状況を話した。そして、賢が祐子を察知できなくなったということは祐子の意識が、自分に向かなくなった為で、今なら亜希子が祐子を追跡できるかもしれないと言った。亜希子は直ぐに瞑想状態に入った。暫くして、亜希子は再び祐子の状況を捕らえることに成功した。祐子は7人の女性たちと同じ部屋に居ることが分った。祐子が誰かと話をしている。少しして、ドアが開いて3人の人間が入って来たようだ。二人が乱暴な動きで、女性のうちの一人を縛り上げている。それから、その女性を担いで外に出て行った。祐子はその後を追っている。祐子が泣いているのが分る。祐子が殴られて倒れた。祐子は起き上がって、縋り付いて泣いている。その時隣の扉が開いて、男が現われた。その男はさっき賢が見たと説明していた男に良く似た風貌だ。祐子の近くに来るといきなり祐子を蹴り倒した。祐子は起き上がって縋ったが、また蹴り倒されたようだ。そこでイメージの映像は消えた。

亜希子は、祐子の身に何かあったのだと感じた。亜希子は悲しみと不安に駆られた。それからはどんなに祐子の意識を探しても見つからなかった。賢もやってみたが駄目だった。賢は康介に電話を掛けた。康介はその状況を理解したようだった。梓が戻って来て、今康介の部屋に居ると言った。賢は電話を梓に代わってもらった。

「リーダー、心配をお掛けして済みませんでした。少し、霊的な地域を訪れて見ました。会社への報告にそれが必要だと思いましたので」

「ありがとうございます。僕もそのことが気に掛かってはいました。田辺さんのおかげで、形を作ることができます」

「それから、書店に寄ってみました。英文の書籍で、人身売買に附いての書籍を探してみました。1冊だけですが、薄い小冊子を見つけました。やはりそういう組織が根強く残っているようです。カルカッタより、ムンバイの方が、売春関係の組織は多いようですが、極東との売買は東の地域の方がいるようです。上手く当たればいいのですが……」

「そう、願っているよ。兎に角、無事でよかった。もう、一人で外出しては駄目だぞ。特に夜は絶対外に出ないほうがいい」

「はい、もうしません」

電話を切ると、亜希子が一生懸命祐子の意識を探していた。目に一杯涙を貯めている。

「祐子お姉さまはあの男に蹴り飛ばされました。お怪我が無ければいいのですが……どうしましょう。どうしましょう。どうしても、祐子お姉さまを捕らえられません」

「ブリクロンさんやチダピオンさんは、長い間、人身売買組織を追い掛けてきているから、恐らく祐子の居る場所に間違いは無いだらう。あとは祐子が無事で居てくれることと、上手く救出できることを祈るだけだ」

10時を過ぎてふたりはもう一度トライした。やはり駄目だった。失意の中で、兎に角明日に期待することにして、賢は床に着くことにした。亜希子は賢と一緒に居たい気持ちを抑えて、自分の部屋に戻って休むことにした。家から連絡が入ることも想定しておく必要があった。翌朝はふたりとも朝食を省いた。いつでも連絡を受けることのできる状態を維

持した。しかし、チェックアウトするまで、何の連絡も入らなかった。賢は亜希子に連絡を取って、9時にチェックアウトを済ませた。ふたりはトラベルバッグを引いて、ロビーを見渡し外が見える場所にあるソファに陣取った。いくつもの人影が車道からホテルのエントランスに向かって近付いて来ては通り過ぎてゆく。ふたりはじっと外を見つめていた。20分ほどして、ホテルのカウンターにいた女性が賢の下にやって来た。FAXのメッセージを持参していた。

「To the hotel person: Please hand this message to Mr.Uchimi who will be in the Lobby now, thank you. I suppose that he has already checked out in this morning.

---

内観様

計画どおりとなる見込みです。9時45分頃から、スタンバイねがいます。その後は予定どおり。

鹿島」

文章は手書きだった。賢は筆跡を観てそれが梓の書いたものだと分った。梓とは今回の計画に附いてほとんど会話を交わしていなかった。しかし、肝心なことにはしっかり参画しているのが分る。やはり信頼の置ける女房役だった。賢と亜希子はもう一度手荷物を確認した。確認を終えると、亜希子がロビーの隅にある売店に行ってクッキーとオレンジジュースを買って来た。ふたりはクッキーを齧りながら外を歩き交う人々を見つめていた。10時を回ろうとしたとき、道行く人たちが一斉に同じ方向に顔を向けた。人々の視線の彼方に、わずかだが火の手が上がり、煙がもうもうと立ち上っているのが見えた。賢と亜希子に緊張が走った。ふたりは食べ掛けのクッキーとジュースのパックをテーブルの上に置いて、外の人々の動きを凝視した。何人かの人が煙の方向に向かって駆け出している。パトカーが走り去り、少ししてから消防車が2台通り過ぎた。賢はフロントに行き、オート力車でない普通車のタクシーを2台頼んだ。15分ほどして、タクシーが来たことをベルボーイが知らせに来た。賢は、ベルボーイにタクシーを待たせるように頼んで、再びソファに戻

った。それから15分ほどして、ブリクロンが女性を3人連れてエントランスから入って来た。女性は遊牧民の民族衣装のような服を身に着け、白いレースのベールを首まで届くように額に掛けて顔を隠している。賢と亜希子は立ち上がり、その女性のうちの一人が祐子に違いないと思って、ブリクロンに手を振って合図をした。ブリクロンは近くに来ると、言った。

「一足違いでした。今、仲間が探しています。でも、難しいかもしれない」

「それは、どういうこと？」

3人の女性がベールを上げて、顔を見せた。

「詳しい話は後にして、それより、早くここから出ないと危険です。タクシー呼びましょう」

「もう、呼んであります。2台、エントランスに来ています」

「直ぐに出れますか？」

「はい、・・・亜希子、大丈夫だな？」

「はい、大丈夫です」

タクシーの運転手は車から出て、タバコをふかしていた。ベルボーイに催促されて、足でタバコをもみ消すと、賢と亜希子の荷物を載せた。ブリクロンが2台のタクシーの運転手に行き先を告げた。1台目にブリクロンと女性3人、もう一台に賢と亜希子が乗って、タクシーは空港に向けて出発した。

「どうしたのかしら？祐子お姉さまはどうされたのかしら？失敗だったのかしら？でも、女の方3人を連れてらしたわ。あなた、どうしたらいいかしら・・・」

「うん、多分祐子が、予想した場所に居なかったんじゃないかと思う。囚われていた女性を救って来たんだろう」

空港に着くと、ブリクロンは賢と亜希子のパスポートとオープンチケットを手にしてIALの国内線チェックインカウンターに向かった。国内線なので、3人の女性のチケットも簡単に入手できた。ブリクロンが6人分のチェックインを纏めて済ますと、空港内の軽食が摂れるショップ

通りに向かった。ブリクロンが周囲を警戒しているのが分る。何人かの警備員と行き交ったが、特に警戒を強化している様子は無かった。6人は1軒の中華料理店に入った。案内係が一番奥のテーブルに6人を案内した。ブリクロンは女性たちを、通路に背を向けるような位置に座らせ、ウェイターが来ると、セット料理を6人分頼んだ。ウェイターが厨房に消えると、ブリクロンはこれまでの経過を賢と亜希子に説明した。全ての爆破と突入は成功したと言った。しかし、祐子の姿は無かったと言った。賢の感は当たっていた。やはり、祐子は予想した場所には居なかった。救助隊が雪崩れ込んだとき、手を前で縛られた一人の女性が男たちに連れられて奥のほうから出口に向かって来るところだった。その派手な服装と、手を前で縛られていることで、隊員たちはその女性が幽閉されていた女性であることを直感的に覚った。救助隊は先ず二人の男をなぎ倒してから、その女性を奪い返した。隊員たちは女性から話を聴いた。ヒンズー語は通じるようだった。女性の話から、祐子らしき女性が既に昨夜のうちにこの建物から連れ出されていて、何処に連れて行かれたのかわからないということを知った。残りの2つのハーレムからは日本人は発見できなかった。3つのハーレムを襲った部隊は、祐子が居ないと分ると、直ぐにそこを引き上げた。更に踏み込んでの救出は行わなかった。救出の手掛かりになる幽閉を示す証拠が無かったからだ。祐子の足跡は見つからなかった。一つの売春宿を襲撃した隊員達は、丁度二人の女性を連れて売春宿に入って来た二人のバイヤー達が、爆破とその後の襲撃を見て、恐れをなして逃げ出そうとしたところを、運び屋に現場を見せるために張り込んでいた5人の男たちに捕らえさせて、女性たちを奪い返させた。ブリクロンは、女たちを連れて集まった男たちにチップを与え、3人の女性を引き取ってホテルに連れて来たとの事だった。手数料は全てが完了した段階で支払う約束だったが、途中で予想外の結果をもたらした行動には心付けを与えていた。ホテルに向かう途中で、彼はハーレムから出て来た女性から、一人の勇敢な女性の話をして聴いた。その女性が急に大きな声で笑い出す話をした。ブリクロンはホテルに着いてから、賢と亜希子にその話をした。ふたりはそれが船底に幽閉されて



いたときの祐子の特徴と同じだと思った。突然大笑いをするのは救出された女性たちから聞いた祐子の奇行だった。ハーレムの女性は、祐子が既に売春宿に売り払われてしまっているはずだと言った。祐子はとても勇気のある女性だと言った。自分を助ける為に身体を張ってくれたと言った。ハーレムの主にも屈しなかったと言った。そのために、祐子はハーレムの主から邪魔な存在として排除されたのだと言った。自分は一度は祐子が助けてくれたものの、やはり祐子がいなくなったら、直ぐにまたお払い箱にされる段取りになっていて、外に連れ出された丁度その時に救助隊に救われたのだと言った。

料理が運ばれて来た。一人ずつトレイに載せられた料理だった。6人は黙々と料理を食べた。特に女性たちはとても美味しそうに食べた。賢も亜希子も少し香辛料が利きすぎていると思ったが、それでも美味しく感じた。その時、レストランの外を5、6人の男たちが、駆け抜けて行った。明らかに旅行客ではなかった。食事が済むと、ブリクロンは3人の女性にレストランの外の右方向を示しながら耳打ちをした。3人の女性は急いで席を立つと、レストランから出てきよろきよろしながらブリクロンの示した方に向かって急ぎ足で歩いて行った。

「どうしたのですか？」

「彼女たち、トイレに隠れるのがいい。搭乗の少し前に、お嬢さん、彼女たちを迎えに行ってもらいたい。いいですか？」

「わかりました。でも、3人だけで大丈夫かしら？わたくし、少し見てまいります」

そう言うと亜希子は席を立って、レストランから出て行った。

「やはり、追跡されているようですか？」

「分かりません。でも、ここは危ないところ。用心して、し過ぎること無いです」

暫らくして、亜希子は戻って来た。女性たちは鏡の前でうろうろしていたと言った。亜希子はトイレの中に入るように促して、便座に座っているように、ジュエチャーで示して来たと言った。3人はレストランから出てゲートに向かった。チェックインまでには30分ほどの時間があっ

た。ゲートの近くにトイレがある。先ほどのレストランまでは1分ほど掛かる。ブリクロンは亜希子に、女性たちをゲートの近くのトイレに移動して隠れているようにして欲しいと頼んだ。亜希子が3人を連れて戻って来ると、後方から先ほどの5人の男性が小走りで亜希子達に向かって来た。亜希子はそれに気付いた。亜希子も3人を促して、小走りで戻って来ると、急いで女性用トイレに駆け込んだ。5人の男たちは女性用のトイレの前でうろうろしている。ブリクロンは立ち上がると、遠方に見えた警備員のところにゆっくりと歩いてゆき、何か話をした。警備員がトランシーバーで話している。10秒ほどして、別の3人の警備員がやって来た。警備員達は女性用のトイレの前でうろうろしている男5人に向かって大きな声で威嚇すると、拳銃を取り出すポーズを示した。2人の男が逃げ出した。2人の警備員がそれを追った。3人の男は両手を上げて、警備員に服従を示した。逃げた2人も取り押さえられた。周りには人だかりが出来た。5人の男たちは警備員に引き立てられて通りを元来た方向に向かって去って行った。

「やはり、追跡されていたんですね」

「ええ、何事も無くてよかったです」

チェックインが始まった。亜希子はトイレに向かい。3人の女性を連れて出て来た。女性達は怯えていた。しかし、飛行機に乗ると一転して安心した様子を見せた。ブリクロンが賢に言った。

「この娘（こ）たちは、生まれて初めて飛行機に乗るようです」

賢と亜希子が並んで座り、その後ろの1列にブリクロンと3人の女性が座った。席に着くと、二人の娘は現地語で嬉しそうに、話し合っている。ブリクロンは通路側で、その隣にハーレムの女性を座らせた。二人の女性は鼻歌を歌っていたが、やがて、つかえつかえながら、声を潜めて「さくら」を歌い始めた。賢は二人が1回歌い終わったとき、ブリクロンに何故その歌を知っているか聞いて欲しいと声を掛けた。ブリクロンがふたりに話し掛けた。ふたりの娘はブリクロンに対して交互に話をした。とても生き生きとした顔をして説明している。ブリクロンも微笑みながらそれを聞いていた。暫くして、ふたりの内ブリクロンに近い丸顔の方

の娘が話しの説明の中で「わっはっはっは・・・」という笑いの引用をしたが、それを耳にして亜希子が賢に言った。

「祐子お姉さまじゃないかしら？まだ、ここにいらっしやったのよ。ねえあなた、戻りましょう。もう一度探しましょう」

まだ、飛行機はタラップに留まっていた。ブリクロンが言った。

「お嬢様、それは無理です。この娘（こ）たち、そのひとは競売に掛けられて誰か外国の女の人、落札してしまった言ってます。もう、何処かに移動している思います」

亜希子は黙ってしまった。やがてアナウンスがあり、離陸の態勢に入ることが知らされた。スチュワーデスがやって来て、ふたりの娘の世話をした。ブリクロンは後ろを振り向き小声で説明を始めた。

「多分、祐子さんだったと思います。競売の開かれた場所が特定できませんが、あのハーレムの近くだと思います。同じ檻に、祐子さんと3人の娘が入れられていました。絶望と悲しみに打ちひしがれたこの娘（こ）たちに、歌を教え、ご自分の食事を与えました。ご自分が売られるまで、歌を歌っていて、時々大笑いしていました。檻の中と壇上ではブタの真似をして、その後で、急に泣き出したりしました。この娘たちが連れられてゆくとき、声を掛けてくれました。大きな声で、「生き抜くのよ。わたくしが必ず助けに行くわ」と。この娘たちは、言葉は理解していませんでした。でも意味は分ったと言っています。その言葉が嬉しくて、涙が流れたと言っています。やさしいお母様のようなだったって」

亜希子がそれを聞いて、すすり泣きだした。ふたりの娘の世話をしたスチュワーデスが直ぐに戻って来て、どこか具合が悪いのかと聞いた。亜希子は首を横に振った。賢が亜希子にハンカチを渡した。亜希子はそれで目を拭い、口を押さえて嗚咽を發した。

ムンバイの空港は手荷物だけだったので、直ぐにEXITを出ることができた。EXITを出たところに「Mr. Uchimi」というプラスチックのカードを手にしたインド人が立っていた。その男はホテルのシャトルバスをチャーターして来ていた。ブリクロンが事前到手配してあった。そのインド人は賢にも話が分るように意識していると見えて、日本語で

ブリクロンに言った。

「駄目、ばれた。だから、ムンバイはやれなかった」

ブリクロンは訊いた。

「だれか捕まったか？」

「いや、誰も捕まらない。警戒大きくなった。見張りも居た。だから、近付けない」

ホテルに入ったのは2時過ぎだった。チェックインを済ますと、ブリクロンが携帯電話でチタビオンと連絡を取った。電話が通じると携帯電話を賢に渡してよこした。電話には鹿島が出た。

「内観さん、駄目だったんですね。残念だな。追跡のしようは無かったんでしょうか？」

「ええ、彼女はこちらにいるおふたりともう一人の3人の娘さんと一緒に競売に掛けられたんです。そこで競り落とされたようです。競り落とした者がどうもこの国の者じゃなさそうなんです。追跡のしようがないんです。残念です。もう言っても仕方ないことですが、あと1日早ければ多分救い出せました。場所も正しかったし、皆さん計画通りに実行してくれました。本当に残念です。爆破は完璧ではなかったけど、一応実行していただきましたので、明日ブリクロンさんの口座に残金900万円を振り込みます」

鹿島は、それには応えずに言った。

「犯罪の組織は、案外決まったルートで動いているものすよ。だから、その筋から情報を手に入れることさえできれば、自ずと次のターゲットが見えてくるっす。まあ、直ぐにというわけには行きませんが、2週間もあれば、糸口は掴めると思うっす。問題は、その間、崎野さんの身の安全が確保されるかどうか。そればかりはどうすることもできないっす。ところで、田辺さんはそっちに向かって発ったす。俺は後始末をしてから、明日そっちに向かうっす」

賢と亜希子は、今日の便でデリーに来る梓を待つて合流し、翌日3人でそこからクリシュナの生誕地マトゥラーと幼少期に育ったブリンダヴァンの調査に向かうことにした。会社の業務としての調査をしないで帰

国する訳にはいかなかった。祐子と一緒に競売に掛けられた二人はブリクロンの出身地の隣村の娘たちであるとの事だった。その地域は生活が苦しく、若い娘を売ってその金で生計を繋ぐしかないところまで追い込まれているとブリクロンが言った。国の援助もなく、何の為にその土地で生きていかなければならないのか、疑問に思ってもそこから抜け出すには、外から訪れる歪んだ未来に賭けるしかなかった。売られる女性たちは、その何日も前から悲しみの日々を送らなければならなかった。家族も共に悲しんだ。別れの日には、家族は近所の者に気付かれないように、こっそりと娘を送り出した。しかし、どこの家でもその事は分かっていて、その日には戸外にはほとんど人影が無くなった。ブリクロンは物心附いた頃から、そういう貧しく、悲しい家族を救いたいと思っていた。しかし、その思いも次第に、人身売買という悪事を許せない気持ちに変わっていった。終に20歳になったとき家を飛び出した。家には長男が残ったので、足枷なしに身体一つで挑戦できた。ムンバイで日系の企業に就職でき、そこで人身売買組織を壊滅に追い込む機会を狙っていた。やがて、日本にも人身売買の供給ルートがあることを察知したブリクロンは、同じような志を持ったチタビオンと巡り会い、日本のNGOと連携して取り組むことになった。日本の供給ルートは非合法的な犯罪組織で、競売に掛ける女性を拉致したり誘拐したりして海外に売り飛ばしていた。その中でも特に高学歴で美人の若い女性は、別格として非常に高価で取引された。しかし、そういう女性は一旦売られたら、もうその所在を追跡することは不可能に近く、どこに連れて行かれたのか皆目見当も付かないとの事だった。ブリクロンたちが掴んでいる情報では、高価で買い取られた女性は単なる売春組織に売られるのではなく、アフリカや南アメリカの富裕な家に下女として買い取られ、場合によってはそのセカンドワイフにさせられたり、養母にさせられたり、時としては正妻に納まる場合もあるとの事だった。また、大きな組織に買い取られる場合もあり、そのような場合は首長の妻にさせられたり、セカンドワイフにさせられたり、その女性に手腕があると認めると、組織のメンバーを指導するスーパーバイザー的な存在にすることもあるとの事だっ

た。しかし、それはあくまで悲運の下でも運がいい場合で、下手をすれば、奴隷として快樂の対象にさせられ、飽きられると鬼畜同様の扱いを受け、そのまま命を落とす場合もあるとの事だった。祐子の場合も、拉致したグループは初め、彼女を特別の存在として売り捌く計画だったろうとブリクロンは言った。しかし、拉致計画が途中で挫折しているのも、その後、どのような展開になっているか分らないが、少なくとも売春婦の競売と同じ競売に掛けられているので、現段階では特別扱いされているかどうか疑問だと言った。ブリクロンはハーレムから逃れた女性を、雇った男を使って警察に引き渡してから、二人の娘を自分の働いている日系の会社の直工として雇ってもらい、ムンバイで生活させると言った。それも大変な仕事になるが、賢の支払う予定の金を一部それに充当すると言った。売人の追跡を受ける可能性があり、非常に危険なので、直ぐに故郷に連れ帰ることはせず、暫らく様子を伺った後にするとのことだった。今日梓がデリーに発った後、康介は作戦の最終確認をしてから翌日デリーに発ちそこで、ブリクロンたちと合流し、行動を共にすることだった。ブリクロンは宿泊費の安いホテルに移動するために二人の女性を連れてタクシーで出て行った。賢と亜希子は一旦自分達の部屋に入り、シャワーを浴びてそのまま梓を待つことにした。賢は衣類をベッドの上に脱ぎ捨てると、直ぐに浴室に向かった。浴室は狭かった。しかし汗を流すのに狭さはない。汗を流してからベッドに身を投げて寛いでいると亜希子がやって来た。シャワーを浴びて、白のワンピースに着替えている。さっぱりとした様子が感じられた。ふたりが寛いでいると、30分ほどして部屋の電話が鳴った。

「Hello!」(もしもし)

「もしもしリーダー、今着きました。後で、そちらの部屋に伺います」

「梓、無事着いてよかった。シャワーを浴びてからでいいからな」

賢、亜希子、梓の3人は賢の部屋のベッドの上に腰掛けて、今後どのようにして祐子を捜索・救出してゆくかについて話し合った。できるだけ早い段階での調査が重要だが、「今は爆破されたハーレムや売春宿が躍起になって爆破の実行者を探しているだろうし、警察の捜索の手も回っ

ているはずだ」というブリクロンの言葉に従って行動することにした。やはり、当面は透視を使うしか方法は無さそうだということになった。両腕を天井に向けて伸ばしながら梓が言った。

「リーダー、残念ですが、いいところまで行ったんですね。あと一歩でした。でもこの先が見えません。今回はインドがターゲットでしたけど、次は世界全体になりますね。ターゲット国の絞込みはかなり難しいと思うんですが……どうしたらいいでしょうか」

賢もそれに応えた。

「そう、でも、悲観的になってばかりいても仕方ないと思います。今度の計画が誤っていなかったのは、やはり、鹿島さんの緻密な計画があったからです。次にどうすればいいか、食事をしながら考えましょう」

亜希子が言った。

「わたくし、お祈りいたします。いつも、祐子お姉さまをお守りいただくようにお祈りいたします」

賢も同調して言った。

「そう、それが大事だと思う。僕たちの意識は常にぶれずに祐子が安全な状態にあると思っていることだ。この世界が写像であるなら、本体は損なわれていない。特に祐子のように純粋な存在は、現存在自体が危機的状態になることはないと思っている」

二人の女性は一旦自分たちの部屋に向かった。部屋で荷物の整理をし、夕食の時間にホテルのレストランで会うことにした。

賢は部屋に入ると直ぐにスーツケースを開けた。梓の作ったリスクヘッジの計画書を手にとると、日本の原に電話を掛けた。明日、ブリクロンの口座に900万円振り込んで欲しいと頼んだ。原は事前に話を聴いていたので直ぐに了解した。電話を切ってベッドに腰掛けていると直ぐに電話が鳴った。梓からだった。

「リーダー、明日の事です、マトゥラーに行くツアーの予約を取りました。日本で、確認しておいたガイドさんと連絡が取れました。それから、マトゥラーのホテルの予約もしました。明日の朝は少し早いですが……」

「いろいろありがとう。それで、何時の出発になるのかな？」

「7時です。ですから、6時半までに食事を済ませてチェックアウトしたほうが良いと思います」

「梓さん、亜希子にも連絡してくれますか？」

「はい、・・・リーダー、クリシュナの生誕地マトゥラーと青年時代に過ごした土地プリンダヴァンに行くということは、クリシュナ神が何か今度のプロジェクト推進の役に立つということでしょうか？わたくしにはよく分らないんですけど」

「クリシュナ神の生きてきた道を見つめてみると分ると思うんだ。ヴィシュヌ神の化身とも言われているクリシュナ神だけど、その名前は黒という意味だ。黒は闇だろう。この世界のことだ。この世界はマーヤー（迷妄）と説いているんだ。この世界に映し出されたヴィシュヌ神の化身が闇であるわけだから、暗に、すべては闇と説いていることになる。これは般若心経と同じだ。それにクリシュナは多くの人々の信仰的になっている。一般には女性が無意識的にクリシュナに惹かれてしまったと云われているが、クリシュナに対する信仰は男女違わずに篤い。特に大事なことは、何故クリシュナが仏陀と違い、厳しい戒律的なことは説かず自由で開放的に生きる道を教えているかということだ。この迷妄の世界をどのように生きるか教えているんだ。だから誰にも、いつまでも信仰されていると思うんだ。この世界が迷妄の世界だと捉えることができると、自ずと意識の重要性が見えて来る。ふつう、人々はほとんど眠っている。起きているときも意識は寝ている。一種の催眠状態にあるようなものだ。我々が在ると思っている世界は、実は真実の実態が絶対存在によって投影されたもので、人々はそれが実体のあるものと錯覚を起こしている。だから、一旦覚醒すれば、今見えているものはすべて消え去り、真実の実態が浮かび上がってくる。まあ、詳しいことはまた時間を見て話すよ。それより、梓、ムンバイではストレスが溜まっただろう。失敗したときは、成功したときより数段ストレスが溜まるからな」

「はい、わたくしもジレンマに陥りましたが、鹿島さんがブリクロンさんと連絡を取り合っていてくれたので、安心していました。リスクヘッ



ジも出来ていましたから最悪の事態にはならないと思っていましたし・・・リーダー、クリシュナ神のこと、分りました」

夕食後、女性たちは賢の部屋に集まった。まず、亜希子が透視で祐子を追ってみた。どうしても祐子の意識を捉えることができなかった。亜希子は時々空を飛んでいるような気がすると言った。1時間ほど挑戦したがとうとう諦めた。今度は賢が祐子の意識と繋がるかどうか試してみた。明らかに祐子は意識を切っているか、無意識状態にいるようだった。祐子の目を通した視界を得ることはできなかった。この日は諦めることにした。

3人は翌日早くにチェックアウトした。ツアーは梓が運転手付きのライトバンをチャーターしていた。梓が既に予約してあるマトゥラーのホテルをガイドに説明した。ガイドは直ぐに分かった。インドの国道を2時間で走るの結構きつようだ。それでも運転手は必死に努力してくれているようだった。警笛を鳴らしながら、何台ものトラックを抜いて走った。ほとんどのトラックがその車体の背に「HORN PLEASE」とか「BLOW HORN」と書いてある。ガイドが、「トラックの運転手は、疲れてボーっとしているから、ホーンを鳴らさないと道を譲らないんだ」と言った。国道からマトゥラーに向かう道に入り、11時少し前にマトゥラーに着いた。市内に入ると、車の動きもスムーズになった。3人は先ずホテルに荷物を預けることにした。車をチャーターしていたので、幸い途中で盗賊などに攻撃されることは無かった。ホテルのベルキャプテンに小バッグ以外の全ての荷物を預けた。ブリクロンから「日本人旅行者は狙われやすいので、荷物はできるだけ持ち歩かない方が良いでしょう」と言われていた。特に偽警官のようなやからがいるので、用心が必要だとも言っていた。3人はパスポートと航空券、財布だけをハンドバッグに入れて出掛けることにした。マトゥラーを訪問して、クリシュナ信仰の状況を把握したらここに一泊し、翌日は布林ダヴァンに行き、クリシュナの遊んだと謂われるヤムナー川を見ようと思った。ヤムナー川もガンジス川と同じ様に聖なる川とのことだ。多くの人の意識がこれらの川が聖なる川であると認識しているからだろう。これらの川の上流では

多くの人々が沐浴したり、動物たちさえ水浴びするのにも拘らず、大腸菌が非常に少ないそうだ。これは将に賢や原智明の言わんとしていることだった。ところが下流の人口の多い地域に至るとこれが、名立たる汚染川になるのだとブリクロンが言っていた。賢は布林ダヴァンで、川での沐浴の様子が見られたら良いと考えていた。それからデリーに戻り、帰国しようと考えていた。帰りは余裕を持って5時間みることにした。「クリシュナは、インドで多くの人々が信仰している神様の一人だそうだよ」

賢が二人に説明した。

マトゥラーには4000を超える寺院があるとのことだった。クリシュナの人気はそのことだけでも分る。主目的としていたバグワット・バワン寺院は、クリシュナ・ジャンマブーミー（生誕地）といわれる丘の上にあった。日本語を流暢に話すガイドの忠告に従って、3人はそれぞれペットボトルの水を手にした。

「こんな日差しの下を、水を飲まずに2時間歩いたら、大抵の人は倒れてしまいます」

車を降りると熱気がフワッと3人を覆った。流石に聖地というだけあって、セキュリティチェックがかなり厳しい。寺院入口では金属探知機で全身をくまなく調べられた上、パスポートと現金以外の手荷物は全て持ち込みを禁じられた。3人はブリクロンの話を聴いていてよかったと思った。荷物を持参している者はそれを入口脇にある手荷物一時預かり所に置いていかななくてはならないため、紛失の覚悟が要る。小バッグも持込が禁止されていた。コインロッカーもなく、バッグはそのまま棚に置くだけだった。係りの者が見張っているようだが、3人ともとても財布やパスポートを預ける勇気は出て来なかった。バッグから財布やパスポート、航空券を取り出さなくてはならなかった。現地人は皆、それを特に不安に思ってもいないようだった。多分、貴重品は持って来ていないのだと賢は思った。夫々8ルピーずつ払い、荷物の引き換え券をもらってゲートを潜った。寺院の中はかなり広々としている。人は多いのだが、一種独特な落ち着いた雰囲気があった。何人かのインド人が寄って

来て話し掛けた。片言の英語で話す者もいるが、ほとんどがヒンズー語のようだった。誰もが皆クリシュナ神を愛しているようで、彼らはそこに居る他の者も皆クリシュナの信奉者だと思っているようだった。それぞれクリシュナ神の話をしているようだった。熱心にいろいろ説明をしてくれている。堂内のクリシュナ像の前では現地の女性達が大勢集まって合唱している。クリシュナを讃えているのである。陶醉しているようだ。賢はその場に幻想的な雰囲気を感じた。しかし、それはあくまで感覚と感情の作り出した世界に思えた。これがヒンドゥー教なんだと思って、ふと、この国の人々の神様の捕らえ方は日本人の感覚に似ていると思った。勿論、日本人は縄文時代の精神がしっかりと根付いている。神は大自然そのものなのだ。インド人が様々な神を信奉し、仏陀をも神々の一人としている感覚が賢には愉快に感じられた。一人の髭を生やした背の高い男が寄って来て、片言の英語で話し掛けてきた。

「You are Japanese. Yes? I love Govinda. God loves us. You? Lord Krishna was born here. Every India People love him. Lets praise Lord Krishna.」(あなた、日本人？わたしはクリシュナ神を愛している。神もわたくしたちを愛している。あなたは？クリシュナはここで生まれたんだ。インドの人々は皆、彼を愛している。さあクリシュナを讃えよう)

賢がその男に言った。

「We love Krishna too. I think Lord Krishna is the supreme Lord who is indwelling in our hearts who is Existence-Absolute, Knowledge-Absolute, Bliss-Absolute, who is the Soul of the universe. We praise him.」(我々もクリシュナを愛しています。クリシュナは至上の神で、我々の心の中におられ、絶対的存在、絶対的智恵、絶対的な至福であられ、宇宙の魂です。我々は彼を賛美します。)

男は口の中で何かもぐもぐ言いながら立ち去った。少し行くと、日本の参道のように出店の並んだ通りを通った。道の両脇にはクリシュナの関連商品がたくさん売られている。ふたりの女性達はあらかじめ日焼け止めを顔や腕に塗り、大き目の帽子を被っている。賢も野球帽を被って出

て来たが、「それにしても暑い」と思った。店と人の通る道との間には牛のいる場所が確保されていて、牛が堂堂と道の真ん中に寝転んでいる。話には聞いていたが、ここはどうして牛だけ特別なのだろうと賢は思った。昼食は大衆レストランでターリーを食べてみた。3人とも食中りを警戒していたが、意外に美味しいのに驚いた。最後にココナッツミルクの汁の中に甘い白団子の入っているデザートが出た。鍋に入っているチャイとよばれているお茶を注いでもらい、3人は少し寛いだ。

「祐子お姉さまは、こんなお食事はさせていただいていないのでしょうかね。お食事をきちんといただいているのかしら？」

亜希子が言った。賢も梓も黙り込んだ。少し間を置いて賢が言った。

「祐子は何かの衝撃で意識を失っているだけではなさそうだ。今までの意識の切れ方から考えると、どうやら自分の意識や思考を完全にコントロールできるようになっているようだ。多分食事もろくに摂っていないだろうが、祐子は大丈夫だ。勿論、そうは言っても窮地に陥っていることに変わりはないと思うけど……」

食事を済ますと、クリシュナ像を拝した人々は、喜悦に酔いしれたかのようにゆったり歩いていった。やはり、形が必要なのかかもしれないと賢は考えた。この世界では目に見えるものを覚醒への道しるべにせざるを得ないのかかもしれないと思った。その時、警官の服を着た男が梓の所に来て何か大声でわめいた。ガイドは少し先まで行ってこちらに気付いていないようだった。梓はきょとんとしている。賢は直ぐに梓の傍に行った。警官は賢の方に姿勢を向け、持ち物を検査するようなポーズを取った。賢の反応も見ずにいきなり賢の身体に触れ、財布を見つけた。それから300ルピー要求しているようだった。賢は首を横に振り拒否した。すると警官は賢の胸を付き押して、自分のポケットからメモのようなものを取り出し、何か記入するようなポーズを取った。そして、今度は二人の女性の方を指差して何か言った。その時、後ろを振り向いたガイドが小走りで戻って来た。警官になにやら一言二言話すと、警官は急いでその場から逃れるように去って行った。ガイドが言った。

「ああいう悪いやつもいます。絶対払っちゃだめです。あなたがたは日

本人なので狙われるんです。インドは旅行者にとっては危険な国です」  
3人はブリクロンが忠告した通りだと思った。しかし、ゲートでは問題なくハンドバッグを返してもらえた。3人はガイドに導かれて車に戻った。その日はあと2つの寺院を廻ったが、現地人の間に、バグワット・バワン寺院の時ほどの意識の高揚を見ることはできなかった。

3人がホテルに着いたのは5時を回った頃だった。ガイドは運転手が降ろした荷物をホテルのベルボーイに渡すと、翌朝7時に迎えに来ると言って帰って行った。3人とも昨日までの緊張が解けはしたが、祐子を救出できなかった落胆を拭い去ることができず、どうしても寡黙になりがちだった。特に亜希子に元気が無いのが、賢には気に掛かった。

「亜希子さん、元気を出して」

「はい、分かっております。でも、これからどのように祐子お姉さまを探したらよいのか分らなくて。あの3人の人たちは無事に保護されたかしら。ブリクロンさんは追跡を逃れることができたかしら」

賢が言った。

「彼は、警察との関係は良いようだから、悪人どもの追跡さえ交せれば、何とかかなると思うんだ」

「わたくし、心配です。祐子お姉さまのことも、あの女の人たちのことも。とっても心配です」

梓が言った。

「わたくしが、後でブリクロンさんと連絡を取ってみます。リスクヘッジでブリクロンさんとの連絡方法を決めてあります。PCを持参していますから、ネットに入ることさえできれば何とかできます」

賢と亜希子は感心した。梓に任せることにした。3人はとりあえずホテルにチェックインした。一旦シャワーを浴びて、30分後にロビー横のレストランで落ち合うことにした。賢はシャワーを浴びてから衣類を着替え、会社に電話を入れた。楠木に明日の便で戻ることを告げた。会社では特に変わったことはないとのことだった。テレビを点けてみた。UNNニュースに切り替えると、昨日の爆破のニュースが流れていた。テロリストの仕業のようだと言っていた。それが売春組織を狙ったものだ

とはまだ察知していないようだった。賢はレストランに降りた。まだ誰も来ていなかった。賢は案内するウエイターに

「We are three, Two ladies will come soon.」（我々は3人で、女性2人が直ぐに来ます）

と言った。ウエイターが一番奥の4人掛けのテーブルに案内してくれた。全く表情を変えない男だった。賢は瞑目して待つことにした。どれくらいの時間が経ったか分らないが、ふと誰かが賢の肩に触れた。賢は静かに目を開けた。

「君は、内観賢さんだね」

目の前に頭が禿げ、雪柳の花のような白髪髭を伸ばしたインド人と思われる一人の老人が立っていた。賢は日本語で話しかけられたことに、不思議と違和感を覚えなかった。

「はい、わたくしは内観賢ですが、どちら様でしょうか？」

「君が子供の頃、アメリカで君を指導していたヴィリユカナンダというものだが、覚えていないかな？」

賢は記憶を辿ってみた。はっきりと覚えているわけではなかったが、確かに3歳～7歳までの5年間、アメリカの父母の元で生活していた頃にいつも誰かが家に来て、自分と遊んでくれていたことが記憶の片隅に残っているような気がした。

「はっきりとは覚えていません」

「君は、思い出せるはずだよ。意識を集中させてみなさい」

賢が瞑目して、自分自身に退行睡眠を掛けるように、意識を過去に移し集中してゆくと、一人の老人に、いろいろ書物を読んで聞かされたり、話を聴かされたり、目を瞑って何かを思い浮かべたりさせられている自分の姿が見えてきた。その時の老人は黒髪で、足腰もしっかりしていて、若々しいと感じたが、しかし紛れも無くここにいる白髪の老人その人だった。その老人を「スワミ」と呼んでいたことも思い出した。

「あなたは、あのころわたくしを指導して下さったスワミですね」

「やっと思い出したようだな。今回、君がここに来たのは、ブリンダヴァンでクリシュナの生きたヴィジョンを見るためなんだ。だから、ワシ

はここで待っていた。君の考えている究極の自己認識が適うと、クリシュナが行ったことができるようになる。君は、それを全ての人々に知らせるためにこの世に生を受けたのだ。思い出しなさい。クリシュナはこの世界が映し出された世界で、その投影される映像をコントロールすることができた。現在では、それができるものは誰もいないので、クリシュナは神として扱われている。しかし、今この地球は5の段階、強いては10の段階になりつつある。その段階に至ると、いずれ君にもクリシュナの行ったことができるようになる。5の段階に至っても一般の人にはそういうことはできないが、認識力は急に拡大する。あれは一種のデモンストレーションで、今、人類は自分の本来の姿を認識すべき時期に差し掛かっているのだ」

「あなたは どうして、わざわざアメリカまで行って僕にいろいろなことを教えてくださったのですか？それと、どうして今ここに来られたのですか？」

「さっきも言ったように、君がそういう役目を負って生まれて来ているからだ。アガスティアの葉というのを聞いたことがあるだろう。インドでよくある占いだけど、あれと同じようなことだ。アカシツレコードと謂うこの世界の全てを記憶しておく場があるんだが、それを読めば、その人のことは過去も未来も簡単に分る。だが、そんなに多くの者が新しい認識と超越を達成して、人々に模範を示せる訳ではない。君の使命はそれを行うことなのだよ」

いつの間にか亜希子が近くに来ていた。亜希子は立って賢に話し掛けている老人に、静かに頭を下げた。老人は会釈すると、賢に向かって言った。

「この娘は亜希子さんというだろう。君の二人のパートナーの内の一人だな」

亜希子はきょとんとして聞いていた。

「君達はこれから、苦難の道を歩む。しかし、それは必要なことだ。楽しみだな。苦しみに捕らわれるでないぞ・・・では、明日また川岸で会おう」

そう言うと老人はすたすたと入り口に向かって歩いて行った。亜希子が言った。

「あなた、あの方はどなたですか？わたくしのこともおっしゃっていらしたし」

「僕が幼少の頃、アメリカでいろいろなことを教えてくれた先生だよ」

「インドのお方なのですか？」

「そうだ。僕がここに来ることも分かっていたみたいだ」

その時、入り口から梓が入って来た。近くに来ると梓が言った。

「ブリクロンさんと連絡が取れました。後で、詳しくお話します」

それに応えるように亜希子も言った。

「わたくしも、家からの連絡がありましたので、ご報告いたします。それに、祐子お姉さまのことも、今いらっしゃるところのイメージを掴みました」

ウェイターがやって来た。英語で話してくれたので、賢と梓はほっとした。3人はカレーを食べることにした。先ほどのガイドがインドには84種類のカレーがあると言っていた。ここには20種類ほどのカレーがあった。梓は面白がって、最も辛いカレーを頼んだ。亜希子はベジタブルカレー、賢は中辛のチキンカレーを頼んだ。ウェイターは一旦戻ると、水の入ったピッチを持って来て、あらかじめ3人の前にセットされていたグラスに表情一つ変えずに静かに水を注ぎ、黙って戻って行った。賢はインドにはいろいろな性格の人がいるんだと思った。先ず、梓が話し始めた。

「ブリクロンさんと連絡が取れました。鹿島さんも一緒のようです。ハーレムから救い出した女性を警察に連れてゆく前に、彼女に藤代祐子さんのことを訊いたようです。祐子さんは何時もハーレムの女性がお払い箱になるときに扱われるように、競売に掛けられたはずだと言っています。競売の行われる場所に附いては、ハーレム内の女性たちの噂話では、祐子さんの幽閉されていたハーレムのある建物から、200メートルほど先にある木賃宿の前じゃないかと言っています。でも、ブリクロンさんは、「ハーレムの中の噂なので不確かだ」と言っていました。チタビ



オンさんは運輸会社に勤めていて、運輸ルート探索の仕事を担当している関係上、国内の航空機や船舶の出入りする場所に詳しいらしいのです。彼によれば、どうやら売春宿のある歓楽街の近くにチャーターできる航空機が発着する場所があるようです。その会社はカルカッタにも支店があって、それがあのハーレムから南に5キロ位行ったところらしいのです。鹿島さんたちは、そこが「人身売買で買ったSレベルの女性を、遠方に運ぶときに使われているんじゃないか」と考えて、ムンバイ近郊のその空港と港の近くにある、同じような商売をしていると思われる貨物船の発着所に行ってみたとのことです。飛行機発着所の窓口の男は、初めは口を閉ざしていたようですが、鹿島さんに言われて、チタビオンさんがお金をちらつかせ、話を聴き出したようです。チャーター便で昨日、或る便が女性を二人乗せてカルカッタからアフリカの奥地に出発しているということが分かりました。詳しい場所だけはどうしても聞き出せませんでした。チタビオンさんがあまりにしつこく質問するんで、窓口の男が興奮して大きい声を出したようで、その時突然用心棒のような男が出てきたので、ふたりとも慌てて逃げ帰ったようです。その後、港の近くの貨物船の発着所の方にも行ったとのことですが、そこからは情報は得られなかったとのこと。鹿島さんが、明日は、祐子さんを落札した外国人のことをもう少し調べると言っていました」

賢と、亜希子は祐子の行き先が絞り込まれて来ているように感じた。

「梓、少し可能性が出てきたな。なかなか良い情報じゃないか」

「ええリーダー、わたくしも、上手く扱えばどこの国かぐらいまでは分るかも知れないと感じます」

亜希子が言った。

「わたくしも、透視で祐子お姉さまのおられる場所を確かめようとしてきました。やっとのことでどこかの部屋の中にいらっしゃるらしいということまで確認できました。その部屋は、小さな窓が一つとベッドがあるだけの部屋のようなです。でも、ベッドも小さくて粗末に感じました」

「祐子がホテルに居るのは可笑しいしな。一体どこだろう？」

「でも、個室のように感じました。祐子お姉さまのお疲れのご様子が伝

わって来ました。少ししてから、また分らなくなりました」

「落札した奴は、何かの準備のために、一旦どこかの宿舎に祐子を宿泊させたのかな？」

「そうかもしれませんがね、リーダー。これだけの情報では、詳しくは分かりませんね」

梓も、いつの間にか透視の話に違和感を覚えなくなっていた。亜希子が言った。

「でも、わたくし、祐子お姉さまが無事なので安心致しました。それから、もう一つご報告しておくことがあります。父が調査会社に委託して祐子お姉さまを探している件ですが、調査会社からの報告ですと、中央アフリカで民族間紛争が起こっていて、そのうちの一つの民族の首長がいろいろな国から極秘で人材を確保しようとしているらしいのです。その人材というのが、科学技術者と医師と特別慰安婦のようなのです。科学技術者は武器設計製造、医師は住民の医療と戦士の負傷の手当て、特別慰安婦は兵士の士気高揚を目的にしているようです。それが、科学技術者はアメリカ、医師はドイツ、特別慰安婦は日本から確保しようとしていたようで、1ヶ月ほど前にその活動が活発に行われていたようです。現在は活動事態が沈静したのか、それとも人材確保が達成されたのか、あまり動きがなくなったということです。その調査会社は、祐子お姉さまが特別慰安婦として買われたのではないかと言っているようです。やはり、祐子お姉さまがカルカッタに連れて行かれたところまでは把握しているようです。その後、どこに連れて行かれたのかはまだ調査中のようです。でも、調査を継続していますので、「いずれは分るはずだ」と父は申しておりました」

賢が言った。

「やはり、中央アフリカか。早く情報を入手して、救出に向かいたいが、紛争地域だと、侵入すること自体が難しいから、確かな情報に基づいて、かなり慎重に行動を起こさなければならないだろうな」

2人のウェイターがカレーを運んで来た。まず、テーブルの真ん中にナンを5、6枚入れた籠を置いた。それからスプーンの差し込んである赤

黒い色のカレーの入ったトレイと、ピクルスのような漬物を入れた小皿を中央に置き、3人の前に夫々ライスの皿を置いた。3人は食事を始めた。早速カレーをライスにかけ、一匙掬って口に入れた梓が目を細めて言った。

「わー、辛いわー！凄く辛い。すごいわ！」

賢はげらげらと笑った。亜希子も遠慮がちに笑った。

「梓、水、水」

梓は、急いでグラスを手にして、水を口に含んだ。それを飲み込むと、

「ふーっ」と息を吐いた。

「凄いわね。皆さんはどう？」

亜希子が言った。

「ええ、辛いですわ。でも、我慢できますわよ」

賢はまた笑った。

食事が済むと、3人は明朝6時半にチェックアウトする約束をして、部屋に戻った。7時を回っていた。賢は部屋に入ると、暫し瞑想をすることにした。瞑想と同時に自分の意識を祐子に向けてみようと思った。思考を止めて暫らくすると、額の奥に無限に広がる草原が見えて来た。その草原には一本の道が遥か彼方まで続いていた。空は快晴で雲ひとつ無い。賢はその道を歩いていた。暫らく歩いていると、遠方に、蟻のような小さな人影が見えた。白い服を着ている。その人影が次第に近付いて来た。それは紛れも無く祐子だった。祐子も賢に気が付いた。祐子は右手を大きく振った。賢も右手を思い切り振って応えた。祐子が駆けて来た。随分離れていると思ったが、祐子が駆け出すと、もう目の前に来ていた。

「あなた、逢いたかった」

祐子はそう言うと、賢の胸に飛び込んだ。ふたりは強く抱き合った。賢はそれが想像の世界だと思っていた。抱き締めても手が祐子の身体を通り抜けると思っていた。しかし、実体は異なった。祐子は、あの祐子だった。賢の両掌がしっかりと、祐子の背中に当てられ、肩甲骨の感触がよく分った。「祐子、どうして戻って来られたんだ？今どこにいるんだ？」

「あなた、わたしは自分がどこにいるか分らないわ。長い間飛行機に乗せられていて、それから砂漠のような道をずっと走ってここに来たの。でも、ここがどこなのかは、全く分らないわ。ずっと、辛かったから、そこから逃れる為に、あなたの元に意識を移していたのよ。その時から、わたしは自分をコントロールできるようになったの。凄いでしょ。今のわたしは、ここにいるわたしなの。肉体はどこか、知らない国の、小さな部屋のベッドの上にあるわ。でも、あなたがよく言っていた意識はここにしかないの」

「そうか、だから、亜希子がいくら、探しても見つけれない訳だ」

「そうよ。ほとんど、わたしは自分の体から離れているわ。そうしないと、辛すぎるの。随分辛かったのよ。でも、わたしは生きることにしたの。あなたの元に戻らないまま、絶対この世界から消えるわけにはいかないのよ」

「祐子、本当に済まなかった。俺がもう少し、お前のことを気遣っていたら、こんな事態にはならなかったのに」

「ううん、いいのよ。良い経験をしているわ。辛いけど。苦しんでいる人たちのことがよく分かってきたわ。その中に入らなければ、分らないことなのね。いままでは、テレビを見て、「あの人たちかわいそう」とか、「あの災害にいくら寄付しよう」なんて、思っていたけど、それは自分自身に向かって言っていた言葉だったと分ったわ。本当のことは、その人の前に立って、その人の中に入らなくては分らないの。今は、それができるの。辛く、苦しく、皆に会えなくてとても寂しいけど、そういう経験ができるのをとてもありがたく思っているわ」

「そうか、祐子がそう思っていると聞いて幾分安心した。現在俺たちは、何とかお前を救い出そうと思って行動を起こしているんだ」

「ありがとう。早く助けに来てね。でも、わたしはじっと待つてはいられないわ。それは辛すぎるから」

賢は祐子の肩を強く抱き締めた。祐子が以前より、ずっと痩せていることに気付いた。

「痩せたな。食べてないのか？」

「時々食べているわ。でも、大丈夫よ。あまり、お腹も空かないわ。それより、あなた、ここはどこかしら？」

「お前の意識の中だよ。お前が俺を呼んだんだ。丁度俺が瞑想していたから、お前の意識の中に入れたんだ」

「嬉しいわ。ずっとこのままでいたい」

「俺も、こうしていたい」

その時遠くの方で「ドンドン」とドアを叩く音がした。賢の意識から祐子がパッと消えた、と同時に草原も消えた。賢は瞑想を維持したが、もう、祐子も草原も現われなかった。賢は目を開いた。ベッドサイドの時計を見ると10時23分を指していた。「今のは祐子だ。確かに祐子だった」賢に喜びの感情が湧き上がってきた。「祐子は無事だった。痩せたが、強くなった」賢の頬を涙が伝わって流れた。その時、ドアをノックする音がした。賢は目を開けて、ドアに近付いた。

「Anyone is there?」

「わたくしです」

賢は扉を開いた。

「あなた、あれから何度挑戦してみても祐子お姉さまのこと、どうしてもわかりませんでした」

「まあ、中に入って。いま、祐子と話をしたばかりだよ」

「えっ？今、何とおっしゃいました？」

「祐子と話をしていたんだ。ついさっきまで」

亜希子の顔がパッと明るくなった。亜希子が部屋に入ると、賢は扉を閉めチェーンロックを掛けた。ふたりはベッドの端に腰掛けた。賢は、先ほど瞑想の中で祐子と会い、話をしたことを亜希子に説明した。

「祐子は、自分の居る場所がどの辺りか、皆目見当が付かないらしい。随分飛行機に乗っていたと言っていた。それから砂漠の中を走って、現在居るところに着いたようだ。祐子は意識を肉体から切り離して、苦しみから逃れようとしているようだ。随分辛そうだった」

「あなた、祐子お姉さまとどこでお会いになったのですか？」

「瞑想して、俺が祐子の意識の中に入って行ったんだ」

「それは、あの失踪から帰還する時のような感じかしら？」

「そうだな、あの感覚に似ている。だけど、もっとリアリティがあった。祐子は紛れも無く祐子だった。身体もイメージではなくて固体として感じられた」

「そうでしたか。祐子お姉さまはお元気でいらっしゃいましたか？」

「うん、元氣は元氣だが、随分痩せてしまっていた。あまり、食べていないようだ」

亜希子は目を潤ませた。

「やはり、祐子お姉さまは、きちんとお食事をされていないんですね。ああ、どうでしょう。あなた、わたくしたちはどうしたらよろしいのでしょうか」

「亜希子、もう一度祐子のことを透視してみてくれないか？祐子の意識とコンタクトしているとき、急にドアをノックする音がして、意識の接続が切れたんだ」

「わたくしのノックで、切れてしまったのですか？どうでしょう」

「いや、違う。祐子の居る部屋のドアがノックされたのを、祐子の意識が捕らえたようなんだ。その時に祐子は意識を自分の体に戻したようなんだ」

「分かりました。直ぐにやってみますわ」

そう言うと亜希子は瞑目し、瞑想状態に入った。

「祐子お姉さまが見えます。広い場所に誰か女の人と一緒にいます。その場所には大勢の人がひしめき合っています。ああ、分ります。みんな、横になっています。まるで折り重なってでもいるかのようです。大勢です。みんな包帯を巻いています。手や、足や、頭などに包帯を巻いています。大勢です。そこは倉庫のようですが、とても広いところです。よく観ると、包帯は所々黄色や、赤い色で染まっています。怪我をした人たちのようです」

そう言い終わると、亜希子は突然黙ってしまい、暫らくの間じっと動かなかった。5分ほどして亜希子がまた話し始めた。

「祐子お姉さまは女の人と一緒に、横たわっている人たちの間を歩いて

います。大勢います。奥の隅まで行って、横たわっている一人の人・・・  
そう少年です。少年の前に来ました。あっ！その少年は片足です。片方の足には包帯が巻かれていて、腿の途中から先がありません。少年は横になっていて全く動きません。祐子お姉さまが泣いています。その場に座り込んで少年の頭を撫でています。女の人が、祐子お姉さまの肩に手を掛けています。その女の方は年配の方のようです。祐子お姉さまは立ち上がりました。それからまた、ふたりでどこかに向かって歩いています。狭い廊下のようなです。その先に部屋が3つあるようです。一つ目の部屋のドアを開けました。そこは個室のようです。あっ！また見えなくなりました。分らなくなりました。祐子お姉さまが意識を切ったようです」

少しして、亜希子は目を開けた。

「あなた、祐子お姉さまは大変な場所にいらっしゃるようです。大勢の怪我をした人たちが横になっている広い場所のようでした」

「祐子はどこかの紛争地域に連れて行かれたのかもしれないな。危険だ。何をさせられるのだろうか。今は祈るしかない」

その時電話が鳴った。賢は受話器を取った。交換手が日本からの電話だと言った。

「もしもし、内観さんですか？」

「はい、内観ですが」

「わたくし、藤代の家内でございます。亜希子はそちらのお部屋にお邪魔しておりませんか？」

「奥様、亜希子さんなら、いらしてます」

そう言うと賢は立ち上がって電話の傍に来た亜希子に受話器を渡した。亜希子は受話器の傍のベッドの隅に座った。

「お母様、どうなさいましたか？」

「亜希子さん、今日は何事も無かったかしら？」

「お母様、どういう意味でしょうか？」

「あなたたちは、追跡される可能性があるのですよ。カルカッタで爆破事件が起きたのはご存知かしら？」

「はい、知っておりますわ」

「インド警察がその前後にカルカッタに入って来た外国人を追跡し始めたようなのよ」

「でも、外国人は大勢いるでしょう」

「それがね、日本人にターゲットを搾り出したようなの。だから、できるだけ早く帰ってきたほうが良いわ」

「ええ、お母様、明日の夕方の飛行機で帰ります」

「そう、それなら大丈夫ね。でも、警察の動きには注意をしてね」

「はい、分りました」

「それでね、祐子さんを誘拐したのは日本人の犯罪組織で、アフリカと南アメリカに人身売買を行っている組織と繋がっていたようなの。初めは計画通りだったけど途中で失敗して、それから祐子さんがどこに連れて行かれたか分からなくなったようなのよ。地下組織の情報からカルカッタのハーレムに売られたことが分ったわ。販売を斡旋したグループにコンタクトできたって調査会社の人が言っていたわ。ところがそのハーレムは爆破事件のターゲットになっていたらしいのよ。4箇所が同時に爆破されたんだけど、その中の一つだったの。ハーレムの主は政治家と繋がっていて、警察を動かす力があるらしいのよ。今度爆破されたところはいずれも最近日本人を売買したことがある組織だということを警察が掴んだようなの。それで、インド警察は最近カルカッタに入って来た日本人を調べているらしいのよ。亜希子さん、気を付けてね。特にカルカッタとムンバイが調査の対象になっているらしいから、デリーにはまだ調査の手が及んでいないと言っていたわ。2、3日は大丈夫そうよ。くれぐれも気を付けて帰って来てね」

「はい、お母様、十分注意して帰国いたします。内観さんと一緒ですから、絶対大丈夫ですわ」

「すこし、内観さんに代わってくださる？」

亜希子は賢に受話器を渡した。

「内観さんですか？亜希子のこと、よろしく願いいたします。詳しいことは、亜希子からお聴きください。では、失礼します」



「分かりました。十分注意いたします。失礼致します」

受話器を置くと、直ぐにまたベルが鳴った。今度は梓だった。

「リーダー、どなたかと電話されていたのですか？」

「うん、亜希子さんのお母さんと」

「そうですか。何か変わったことがあったのですか？」

「いや、爆破事件のことで警察が動き出しているから注意するようにという電話だった」

「そうですか。実はわたくしも今、そのことを話そうと思っていました。それから、明日のフライト確保できました。3人分OKです」

「ありがとう、それで、何か新しい情報が入ったの？」

「はい、ブリクロンさんとコンタクトしました。鹿島さんとチタビオンさんが調査をしていたんですが、祐子さんを買った女性分かりました。フランス人の女性のように。以前から中央アフリカの3種族の間に起きた民族紛争に絡んで行動している女性戦士で、マリー・ジュベステルという60歳近い年齢（とし）の人です。どうやら、この民族間紛争はヨーロッパの国々が絡んだ、主権争いの闘争のようで、アフリカの住民はその犠牲者のようなのです。民族間に憎しみを生み出し、それで支援という名目で、特定の民族に食料や武器を供給して、そこで抗争を繰り返させ、貿易圏の奪い合いをしているようです。まだ、はっきりしたことは分かりませんが、彼女はそういう各国政府に反発して、対抗する組織を支援しているようですが、手段を選ばずに強行に人材確保を行っている節があります。人身売買も辞さないという姿勢のようです。買われた女性は、慰安婦的な扱いや、医者のおとんどいないプレハブのような建物で、紛争の傷病人や住民の中の病人の世話をするというような過酷な業務を強いられるようです。そういう世界に祐子さんは連れて行かれた可能性があります」

「いろいろありがとう。君は信じないかもしれないが、今ここに亜希子さんが居て、さっきまで祐子を透視していたんだが、どうやら祐子はどこかの紛争地域に連れて行かれたようで、大勢の負傷者の中に居るようだった。君の今の話に通じる部分があるんだ」

「そうですか。リーダー、わたくしもマリー・ジュベステルについての話がどうも本当のことに感じられて、帰国したらもう少し詳しく調べてみようと思っています。でも、鹿島さんとチタビオンさんが執拗に追跡したので、当局に怪しまれ始めているようなのです。それで、今は少しホテルに大人しくしていると言っていました。だから、わたくし達に合流する件は忘れて欲しいと言っています。ブリクロンさんは、わたくしたちに対して、「慎重に行動して警察の動きを警戒するように」と忠告していました」

「分かった。明日は注意して行動しよう。できるだけ早くインドを出たほうが良いな。鹿島さんは一人で大丈夫だろうか？」

「兎に角、少し身を隠していて、それから、チャンスを見計らって帰国すると言っています。ブリクロンさんがケアするようです」

翌日、梓が目を覚まして身支度を整えていると、昨日のガイドから電話が入った。「急用が出来たので、来られない」と言った。「運転手も英語でガイドできるから、我慢して欲しい」と言った。梓は直ぐに賢に連絡した。賢も仕方ないと思った。朝から蒸し暑かった。チェックアウトを済ますと3人はロビーで昨日チャーターした車を待った。運転手が7時20分になって漸くロビーに姿を現した。

「Sorry, Road jamming. Traffic accident.」（ごめん、渋滞。事故だよ）片言の英語で言い訳をしている。賢は軽く頷いた。3人は荷物を引いてエントランスに向かった。その時梓が、3人の紺の制服を着た男たちがエレベータの横でこちらを指差して話している姿に気付き、賢と亜希子に目配せした。賢はそ知らぬ顔をして梓と亜希子から荷物を受け取ると、3人の荷物を運転手に渡した。運転手がハッチを開け荷物を押し込んでいる間に、3人は素早く車に乗り込んだ。運転手は運転席に戻ると賢に向かって言った。

「Brindavan?」（ブリンダヴァンですか？）

「Yah, but Yamuna River first please.」（ええ、だけど、ヤムナー川からお願いします。）

運転手は直ぐにスタートした。賢が振り返ると征服の男達がエントランスから出て来る場所だった。運転手は出発した。男達は急ぎ足で車に近づいて来て、車が動き出したのを見ると走って追って来た。

「STOP！」

男達が叫んでいる。賢は運転手に対して、

「Go！」

と強く言った。運転手はアクセルを吹かせた。男達はホテルのゲートを出たところで立ち止まり、そのまま車を凝視していた。賢は胸を撫で下ろした。ブリンダヴァンには30分ほどで着いた。朝が早かった所為か、まだ人がそれほどいない。運転手はクリシュナがゴービーと歌を歌い、踊りを踊ったと謂われている、大きな川の辺に来て車を停めて言った。

「This is Yamuna River.」

3人は車から降りた。朝だというのに4、5人の人たちが沐浴をしている。川のほとりは堤防になっていて、柵も設けられている。賢は川岸に降りられる場所を探して、下に降りて行った。亜希子と梓も賢に附いて行った。川のこちら側は民家が無いが、反対側は川に沿って建物がずらりと並んでいる。賢は堤防のコンクリートに腰掛けて川面を眺めた。じっと眺めていた。亜希子も川面を眺めている。梓は車の方に戻って、運転手に話し掛けている。賢は瞑目した。静かな、しかし華やいだ雰囲気を感じて来た。次第に気分が高揚して来るのを覚る。賢は静かに目を開けた。そこには川底まではっきり分かる澄んだ川が流れている。先ほどまであった堤防も、柵も無くなっていた。向こう岸にずらりと並んで建っていた建物も全く無くなっていて、その代わり何本かの木々が立ち並んでいる。水の中で若い女性たちが水遊びをしている。小鳥が囀り、牛たちがゆったりと川下を渡っている。賢はふと、「この景色はクリシュナの生きていた世界の景色なのではないか？」と思った。こちらの川岸の大きな石の上に腰掛けているのがクリシュナでそれが自分だと感じた。自分は大空から俯瞰して、自分を見ていた。隣に最愛の妻ルクミニが居る。賢はルクミニの肩を抱いた。川の中から5人の若い女性たちが賢に手を振った。かわせみのような美しい青い鳥が飛んで来て、そ

の手に止まった。丘の上にも何人かの女性たちが戯れている。賢はその天国的な情景に浸って喜びを感じていた。こちら側の岸の少し先の川下の方に、一人の女性が頭を膝に埋めるようにして蹲っている。賢はそっと立ち上がるとその女性の所に行った。女性は賢に向かって言った。

「わたしは一月ほど前に夫を亡くしました。親戚の者たちが、わたしに夫の父のセカンドワイフになるように言います。わたしは義理の父の性的な遊び道具になるのは嫌です。いっそ身を投げてしまおうかと思いましたが、皆がそれは許されないことだと言います。でも、他に生きる術が無いのです」

賢はその女性の肩に手を掛けて言った。

「心配しなくても良い。僕が何とかしてあげましょう。この羽を持って、町に行きなさい。この羽で何でも思うことが適います」

賢は自分が何故そう言ったのかも良く分らなかった。1枚の羽にそんなに価値があるはずも無かった。女性は賢を見つめて言った。

「あなたの、その美しいお姿を拝見できて、わたしはもうどうなってもかまいません。あなたに全てを捧げます」

女性が賢にそう言うと、不思議なことに賢の与えた羽が10万ルピーの札束に変わった。賢は女性の手を取って、そっと立ち上がらせた。女性は喜びに打ち震えているようだった。賢は再びルクミニの元に戻った。また至福の時が過ぎていった。その時空に雷鳴が轟いた。水遊びをしていた娘たちは急いで陸に上がった。賢がハッとして振り返ると、後方に先ほどホテルで賢たちを追ってきた3人の男たちが、賢に向かって大声で何か言っている。

「You are Japanese, aren't you?」(おまえは日本人だな?)

「Yes, I am.」(はい)

「You are arrested by the reason for doubt of demolitions in Kalikat! Follow us!」(おまえをカルカッタの爆破容疑で逮捕する。附いて来い)  
その時、土手の上からタクシーの運転手が跳ぶように降りて来た。梓もその後ろを追い掛けて来る。運転手はヒンズー語で3人の男たちに対して、何か話しをしている。何度もクリシュナという言葉が聞こえた。男

たちは3人で暫く話し合っていたが、やがて、

「We are very sorry, we misunderstood that you are a terrorist. He said you are tourists. You came here the day before yesterday, didn't you. May I see your passport please?」（大変申し訳ありませんでした。貴方のことをテロリストと間違えました。彼が、貴方は旅行者だと言いました。貴方は一昨日こちらに来たんですね。パスポートを拝見できますか？）

賢はパスポートを渡した。入国がムンバイだったことが幸いした。3人の男たちは互いに頷きあうと、パスポートを賢に戻して立ち去った。梓が運転手に大目のチップを渡して、賢たちが一昨日インドに来たと言わせたのだった。

男たちが去ってから辺りを見回すと、一人の女性が近付いて来て賢の前で片膝をついて屈みこみ、賢の靴に口づけをした。賢が驚いていると、女性は涙を流して、

「ダンニャバド、クリシュナ」

と言った。賢は優しく女性の肩に触れ微笑んだ。女性は両手を合わせて深くお辞儀をすると、何度も振り返りながらその場を立ち去った。亜希子が言った。

「あなた、あの方にお金を差し上げたのですね」

「いや、鳥の羽を1枚あげただけだ」

亜希子がそう言うので一応財布を調べてみたが、1ルピーも減っていなかった。川に目を移すと、さっきまで沐浴をしていた5人の女性たちが川岸に上がって来ていた。

「不思議なこともあるもんだ。ところで梓、君が運転手に頼んでくれたのか？」

「はい、リーダー。あの人たち、リーダーを疑っているようでしたから。危ないと思って事前に運転手に話しておきました」

「君には、何度助けられるか分らないな」

「いいえ、これがわたくしの役目ですから。ところでリーダー、あの方は未亡人のようですね。ここには各地から未亡人が集まって来ているら

しいんですよ。彼女たちは過酷な運命を背負わされているようです。あの方もきっと生きる望みを失い掛けていたのかもしれませんがね」

「うん、そう言っていた」

「えっ？あの方とお話されたのですか？」

「うん、亡くなったご主人のお父さんとの重婚を強要されて、逃げ出して来たようなんだ。だけど、生きる術が無くて・・・」

「どうして、お分かりになったのですか？」

「別の空間に移動したみたいだった。現在じゃないようだったが、そこにいる人たちは現在の人たちだった」

「へーっ！不思議なこともあるものですね」

梓はこの出来事を非常に奇異に感じた。亜希子は自然の成り行きとして、受け入れていた。3人は車に戻ると、川の上流に移動してみることにした。5分ほど走ってから運転手は車を停めて言った。

「Young Krishuna here. Old Brindavan」(若い時クリシュナはここに居ました。古いブリンダヴァンです)

正確にそう言ったわけではなかったが、3人とも、そこはクリシュナが幼少の頃過ごした場所だということを理解した。

車を降りて川の畔を少し歩くと、前方から昨日会ったヴィリニューカナンダが歩いて来た。賢の近くまで来るとスワミが言った。

「賢、クリシュナの世界を経験できたか？」

「はい、少しそういう場を経験しました。でも、クリシュナの時代と現代がミックスしていたようです」

「それは仕方ないな。君の意識が過去のヴィジョンに結びつかないからだ。本当はクリシュナは過去も未来も無い世界に居たんだ。何時も現在なんだ。君も既に分かっているだろう。現在しか存在しないことは」

「はい、分かっているつもりです」

「いいだろう。ところで、今日は大切なことを教えよう。これは君が幼少の頃、ワシが何度も教えたことなんだが、子供の未成熟な脳では完全には理解できていないから、ここでもう一度覚えなおす必要がある。まあ、ワシが教えた秘法の使い方は大方理解できているようだがな。実際

は君には人にできないことがやれるんだ」

「と仰いますと、僕は、スワミに秘法を教えていただいたのですか？」

「忘れたか？まあ、そのうち思い出すだろう。これから話す内容はクリシュナがアルジュナに教えたヨガの秘法だ」

「ヨガですか!?それを習得するとどうなるのですか？」

「それはいろいろな比喻で云われているが、まあ、常識的な計算をすると、人類が100万年掛ければ達成されない状態に、僅か数年で到達できると謂われている。もっとも、それを達成するには強靱な意志と頭脳と体力が必要になる。だが、君はもうその大半を達成しつつある。後、もう一息というところまで来ている。それを達成すると、仏教でいう如来の段階に到達できる。イエスキリストや仏陀のレベルだ。千里眼、天耳、物質化、非物質化、バイロケーションなんかができるようになる。他人の意思をコントロールすることもできる。だが、君は彼らを超える世界に向かって突き進んでいるだろう。次元の超越という状態だ。それは、時代的な背景が大いに関係している」

「本当にぼくにそんなことが全てできるようになるのでしょうか？」

「最後の詰め部分を達成する為には、やはり、努力が必要だ。瞑想だけじゃ時間が掛かりすぎる」

「それが、クリシュナ神の教えるヨガの手法で達成できるのですか？」

「そうだ。だが、誰にでもできるわけではない。肉体と精神のバランスが取れていない者が行くと、後で大変なことになる」

「お教えいただけたら、慎重に行じてゆきます」

「いいか、先ずこの行法はクリヤ・ヨガと一般に云われている方法で、吸う息を吐く息に提供し、吐く息を吸う息に提供することによって、二つの呼吸を中和する。そうすることで、心臓からプラナを開放し、生命力を自分の支配下に置く。つまり、肺と心臓の動きを静めることで、放出されてくる余ったプラナ、つまり生命力を獲得し、これによって体内の老廃を阻止する。そして、同時にアパナ、つまり体内の老廃物を排除する機能の元になる生命力を制することで、体内の生長を阻止する。こうして、老廃と生長の二つの相互作用を静止させることで、生命力を制

御することができるようになる。これは習熟するのに時間が掛かるかもしれないが、一旦生命力を制御できるようになれば、計り知れない力を手に入れたことになる。既に賢は永遠の生命に附いて認識できていると思うが、それを実感として体験する為には、至高の目標を求めて視線を内なる眉間の一点、額の表面から1センチほど奥の点に固定し、鼻腔と肺の内を流れるプラナとアパナの均衡した交互の流れを制止することだ。そうすることで外界の刺激を断ち、感覚と理性の働きを制して、瞑想する。その状態で我欲と恐怖と怒りを完全に追放すると、永遠の解脱が可能になる。これは修行を通して達成してゆく道だ。賢は修行せずとも既に過去世でこの辺りは実現できている。後は、それを今世の現実のものとして、思い起こすことだ。クリヤ・ヨガは人間の進化を促進する為の手段だと謂われている。過去の賢人たちは宇宙意識の秘密が、呼吸の制御と密接な関係があることを見通していた。ヨガの修行者たちは呼吸を不必要にする独特の技法で、普段心臓の鼓動を維持する為に消費されている生命力を心臓から開放し、この開放された生命力を霊的進化の推進というより高い目的のために利用するのだ。彼らは意思を用いて自己の生命エネルギーを脊髄の6つのセンター—延髄、頸椎、胸椎、腰椎、仙骨、尾骨の位置にある神経叢—に沿って上下に循環させる。この6つの中枢は、象徴的には人間宇宙の黄道帯の12宮に相当する。この鋭敏な脊髄の周囲に、ほんの30秒エネルギーを循環させるだけでも、魂は微妙に進化する。これは普通に生活する場合の1年分に相当する。人間の幽体は、全能の霊的眼という太陽の周りを回転する6つの内的星座の12極で構成されていて、それらはこの3次元の太陽および黄道帯の12宮と相互に関連している。こうして、人間は内的宇宙と外的宇宙の双方の影響を受けているのだ。人間が脳を完全に発達させて、宇宙意識に到達するには、正常で健康な生活を続けたとしても、百万年以上掛かると見込まれる。しかし、クリヤ・ヨガを使えば、賢明な修行者なら、自己訓練の努力で、これが僅か3年で達成できると謂われている。もし1日に8時間半、千回のエネルギー循環を実行できれば、3年という僅かな期間で解脱を達成できるのだ。君には既にこの辺のところは教えてあ



る。後は苦しい行を続けられるかどうかだ。肉体と、脳を鍛え上げていないと途中で発狂したり、廃人になってしまう。だから普通の人にはこれはできない。よほど熟達した者で、しかも指導するグルが付いていないと危険だ。だが、普通の間人でもこれを実現できる方法がある。毎日僅かずつエネルギーを循環させることだ。少しずつやることで、これを達成できる。特に呼吸法は注意をしなければならぬ。心地よい呼吸でこれを実現しないと、身体は異常な反応を示して狂い出す。修行中、脊髄に心地よい爽快感が生じてこなくては駄目だ。このヨガの方法は呼吸を、物理的な作用から、形而上的要素に変えてしまう。靈的に進歩してくると、呼吸を一つの概念として、意識の作用として認識するようになる。意識による呼吸だ。呼吸の速さとそのときの意識の状態との関係はよく分かっているだろう。心に焦りや、苦しみ、情欲などがあるときは自然に速い呼吸になる。しかし、意識が何かを達成しようとして集中しているときや、きわめて微妙で困難な問題に直面しているときは自然に呼吸が遅くなり、集中力が高まる。この状態でいると生命を安定状態に保つことができる。クリヤ・ヨガの修行者は随時、意識的に、全身の細胞に不滅の光を浸透させ、細胞を常に靈的に磁化された状態に保っている。彼らは、合理的に呼吸を不必要な状態に持ってゆくのであって、眠りや、無意識的な行為や、死のプロセスのような、受動的な呼吸の制止状態に入るわけではない。クリヤ・ヨガは意識を肉体に縛り付けている呼吸という絆を解きほぐし、開放することで、修行者の肉体寿命を延ばし、意識を無限に拡大することを可能にする。そして、物質と意識の結びつきを断ち、修行者の感覚を束縛から解放する。修行者は肉体にも呼吸にも束縛されない自己の本性を悟り、自己の本体、君の考えている写像の元になっている自己の根源に到達させることができるのだ。ヨガの技法を用いると、人は、眼耳鼻舌身意の6つの感覚器官から来る、色声香味触法の感覚を自由に繋いだり、切ったりできるようになる。こうして、修行者は自分の意識を靈的世界にも物質的世界にも自由につなぎ替えることができるようになって、瞑想中にも粗暴な感覚や、揺れ動く想念に突き動かされる俗界に引き戻されることも無くなる。自我が消失し、

因果（カルマ）の法則からも抜け出すことができるのだ。賢にはほとんど理解できているかもしれないが、もう一度初心に立ち返って、自分自身を見直してみなさい。現在自分が負っている環境に、如何に自分が突き動かされているかを。君のもう一人のパートナーは別のプロセスで、既にこの境地に達している。彼女にはもう、自我の影は感じられない。賢も早くその状態に戻りなさい。君には今世でやらなくてはならない仕事があるのだ」

賢はじっと話に耳を澄ませていた。スワミの話している内容の大半は、賢が既に達成しなくてはならないと意識しているものだった。ただ、それがクリヤ・ヨガと言えるかどうかは疑問だった。スワミの教えに従おうと決心した。スワミが最後に言った祐子の話は、自分も薄々感じていたことだ。祐子は極限の苦しみを通して、その境地に到達したに違いなかった。

「スワミ、僕は、自分の意識が現実界に埋没していたことに気付きました。自分の意思で、人の意識の方向を変えるなどという傲慢な考えがどうして出てきたのか、自分を省みてみたいと思います。それと同時に、スワミのご指導くださったクリヤ・ヨガを行じてみたいと思います」

「そうだ、そうするといい。お前にはできるはずだ。・・・さあ、もう一度クリシュナの世界を体験するのだ。お前にはクリシュナの行ったことを行える力が内在している・・・もっとも、すべてのものにその力があるのだが、誰もそれを実行できない。それは、総ての統一と集中ができないからだ」

「はい、わたくしもそう感じています。頑張って、本来の自己に立ち戻れるように、この世界にでも、本体を何の歪も無く映し出せるように、努力します・・・というより、意識の歪みを修正し、意識を本質に集中させます」

「そうだ、その言葉を君から聞けて、ワシも安心して、旅立てる」

「どちらか遠くに、お出かけになるのでしょうか？」

「わっ、はっはっはっはっは・・・あの世だよ」

「スワミ、ご冗談でしょう？」

「いや、本当のことだ。明日の正午過ぎが期限だ。君のご両親によろしく伝えてくれ」

「スワミ、そんなことはおっしゃらないでください……」

賢が言葉に詰まり、その場に伏せてスワミの両足に口づけすると、スワミは賢の肩を叩き、静かに微笑んで、ゆっくりした足取りでその場を去って行った。賢は暫し、呆然としていた。気が附くと辺りはさっき見た景色と同じように、建物が消え、木々があちこちに生い茂る景色になっていた。川の兩岸は草原になっていて、その草原に牛や羊が草を食んでいる。賢は自分が川のほとりの草の上に敷いたシルクの敷物の上で、何人かの少年たちと語り合っているのを見た。敷物の上には美しい果物を入れた大きな器が置いてあり、そこに少年たちがいろいろな果物を持ってきては入れている。賢は自分と向き合っている少年がアルジュナという名前であることを知った。やがて空が掻き曇り、そこに蛇の頭を幾つも持つ怪物が現われた。賢に向かって猛り狂って迫って来る。賢はそれが実態のあるものではなく幻影であることを観て取った。立ち上がると、持っていた笛を振り上げ、思い切り怪物の首めがけて投げ付けた。笛は眼に見えないほどの速度で回転し幾つもの怪物の首を切り落として行った。怪物の身体は地響きを立てて倒れ、切り落とされた首は様々な形相の鬼の顔になって四方に転がった。嵐は収まったかに見えたが、彼方から黒い雲が押し寄せて来た。ものすごい雨を降らせている。見る見る野原も木々も水の中に浸かっていった。生き物たちは、水に溺れて苦しみもがいている。賢はそれもマーヤーであると認識した。賢はこの地が歪んで映し出されていると感じ、右手で大地の端を掴むと腰を落として、一気に大地を持ち上げた。持ち上げられた大地から水は流れ落ち、激流になって流れた。賢は暫らく大地を押し上げていたが、やがて水が引いてゆくと、静かに大地を元の位置に下ろした。生き物たちは息づき、喜びに打ち震えた。牛飼いたちが集まって来た。ゴービーが果物を賢に渡した。賢は一つのマンゴーの実を手にして、ガリッと齧った。甘酸っぱい汁が身体に染み渡った。賢はハッとした。辺りの景色はまた、現在に戻っていて、横には亜希子と梓が居て、賢の顔を覗き込んでいた。

「リーダー、どうなさいましたか？先ほどから意識が無いようでしたが」  
「あっ、梓、今クリシュナになっていた。この世界の迷妄を打ち破ったところだった」

「眠られたのですか？」

「いや、別の次元に入っていたようだ。クリシュナの意識に同調したようだ」

亜希子が言った。

「賢さん、多くの女性に囲まれていらしたのですか？」

「いや、悪鬼と戦って、荒れ狂う大地を持ち上げたんだ」

「あら、それは凄いですわね。お伽の世界みたい」

「ある意識が、この世界がマーヤーだということを、僕に見せてくれたんだと思うよ。僕もこの世界が写像だとは思っているが、それにしても、リアリティがあったな」

「わたくしも拝見したかったですわ」

「僕と一緒に瞑想すればよかったね。だけど、亜希子の場合は、戻って来られなくなるかもしれないから、危ないけどね」

「わたくし、本当に心配なんです。でも、あなたが一緒にいてくだされば、大丈夫だと思っています」

それを聞いて梓が言った。

「リーダーのことをとても信頼されていらっしゃるんですね」

「わたくしは、賢さんを100パーセント信じていますし……」

亜希子はそこまで言って口を噤んだ。

それから3人は2つの寺院を拝観して、昼食を摂り、更に2つの寺院を見学してから空港に向かった。空港には5時前に着いた。賢は運転手に約束の料金と少し多めのチップを渡した。3人は警戒の意識を切らなかつた。自分たちに視線を向けている人たちに対して、常に用心を怠らなかつた。賢は鹿島のことが気掛かりだった。梓が空港の公衆電話でブリクロンの居たホテルに電話を入れてみたが、既に今朝チェックアウトしていた。昨夜はホテルに身を隠していると言っていたのだが、事態が変化したことは明らかだった。彼らが一旦ホテルを出てしまうと、もう連

絡の取りようが無かった。空港内のネットカフェがあればまだWEB経由での通信の可能性も残っていたが、ネットカフェは見つからなかった。3人は一旦日本に帰るしかないと考えた。フライトのチェックインが済んだらできるだけ早く出国ゲートを通ってしまいたかった。先ず、手荷物検査を受けた。賢が最初にチェックを受けた。パスポートと搭乗券を出すと、係官は言った。

「What was the purpose of your trip in this country?」（この国に旅行した目的は？）

「Sightseeing.」（観光です）

「Which city did you stay?」（どの都市に滞在しましたか？）

「Delhi and Mathura.」（デリーとマトゥラーです）

係官は執拗に質問を続けた。まるで出国審査である。

「How many people visited this country with you?」（貴方と一緒に何人の方がこの国に来ましたか？）

「Three people including me. Two ladies are together with me. They are my friends.」（自分を入れて3人です。2人の女性と一緒にです。彼女たちは友達です）

賢は亜希子と梓を指差した。その時、隣の列で髭を生やした男の荷物がチェックに引っ掛かった。アラブ系の男性のようである。検査官がその男のバッグから金属製の筒のようなものを取り出した。男は大声で何か喚いている。腰に拳銃を下げた検査官が一斉にその場に駆け寄って、その男を取り囲んだ。賢に質問を浴びせ掛けていた係官は、質問を切り上げて賢を通過させ、亜希子と梓に対しては何も質問せずに、次々に通した。そうしておいて、一旦そのゲートをクローズし、急いでアラブ系の男の近くに移動した。その男の周囲は騒然となっていたが、賢たちはそそくさと荷物を纏めて、急いで出国ゲートに向かった。出国ゲートでも、いろいろな質問を受けた。明らかに警戒体制が強化されている。しかし、周辺に日本人の観光客が大勢いた為か、係官は賢たちに対して特別な疑念を抱いてはいない様だった。賢は鹿島達のことを心配になった。何とか連絡を取りたいと思った。しかしそれはもう不可能だった。

成田空港に着き、入国審査と税関を抜けてEXITを出ると、藤代登紀子と愛子が待っていた。

「お帰りなさい！賢パパ、おやすみだから藤代のおばさんに連れて来ていただいたのよ」

「お帰りなさい！皆さん。徹夜でお疲れでしょう!？」

賢が言った。

「遠いところをお越しいただいて、ありがとうございます。愛子もありがとうございます。やはり、日本に戻って来ると安心しますね」

「そんなに大変だったんですか？あちらでは、精神世界の調査をされたんでしょう」

「はい、兎に角暑いですからね。それだけで随分疲れしました。インドの人たちの持つ精神性は多様だと感じましたが、神への信仰には一種独特のものを感じました」

「そうですか。駐車場に運転手を待たせてあります。さあ、とりあえず車に乗りましょう」

梓は社長の妻の出迎えを受けて、自分だけが部外者のような感覚を抱いた。賢が言った。

「こちらは、僕のサポートをしてくれている田辺梓さんです。この旅行では、我々は田辺さんに随分助けていただきました」

「始めまして、藤代登紀子でございます。亜希子が大変お世話になりました」

「いいえ、わたくしは仕事上の任務ですから、当然の事をしているだけです。奥様、今後ともよろしく願いいたします」

亜希子は母親に対しても、一言も口をきかなかった。表情も沈んだ感じで、そのことが登紀子の心に重く押し掛かって来た。

「亜希子さん、無事に過ごせたのね？」

亜希子はポツリと言った。

「祐子お姉さまは、見つかりませんでした」

その一言で、全員黙ってしまった。車は乗車席が3列ある大型のライトバンだ。運転手は後部のハッチを開けて3人の荷物を積み込むと、全員

乗っていることを確認してから黙って車をスタートさせた。

「あなた方がインドに行っている間に、インドで爆破事件があったのよ。ご存知でしたか？」

賢が応えた。

「はい、わたくしたちも、出国時に厳しいチェックを受けました」

「空港でテロリストが捕まったようですわ。本当に物騒な世の中ですわね。でも、皆さんがご無事で安心致しました。」

「ご心配をお掛けしました。でもあれはカルカッタでの事件でしたから、今度の主な調査地ブリンダヴァンなどでは、それほど大きな問題になっていなかったようです」

「それは何よりでした・・・ところで、祐子はどうなったのでしょうか？ わたくしどもも個人的に調査会社に委託して、調査を進めているのですが、祐子はどうやら、人身売買の組織に誘拐されたようなのです。これからどうやって、祐子を救出したらよいのか苦悶しています」

「僕達も今後、連れて行かれた場所の特定と救出作戦に附いて、探求してゆくつもりです。あまりにも祐子さんが可愛そうで」

賢がそう言うと、亜希子はハンカチで目頭を拭った。暫らく無言の状態が続いて、やがて車は都心環状線から深川線に降り、門前仲町に入った。先ず、賢のマンションの前で賢と愛子を降ろすつもりのようなのだ。車がマンションの駐車場に着くと、賢と愛子が降り、亜希子も続いて降りてしまった。登紀子が言った。

「亜希子さん、あなたは一旦家に帰りなさい」

「おかあさま、わたくしはこちらにお世話になっております。ですから、こちらで降ります」

「でも・・・」

登紀子は言い掛けたが、口をつぐんだ。田辺が遠慮がちに言った。

「わたくしもこちらで降ろしていただけますか？」

「あら、田辺さん、よろしいのよ。あなたのおうちまでお送りしますわ」

「ありがとうございます。奥様、でもわたくしもこちらで皆さんと相談したいことがございますので」

登紀子は諦めた。4人が登紀子に礼を言うと、運転手は車をユーターンさせて元来た道に戻って行った。

部屋に入ると原智明が出迎えてくれた。

「お帰りなさい。今日は朝からこちらにお邪魔しています」

「原さん、留守の間、愛子のことありがとうございました」

「いいえ、お礼を言うのはこちらの方です。朝晩食事をいただいて、すっかり家庭の気分を味わってました。愛子さんは素晴らしいお嫁さんになりますよ」

「あら、いやね、原さん。わたしはまだ中学生よ」

賢は梓の方に半身になって言った。

「原さん、こちらは、僕の同僚の田辺梓さんです。今回の旅でも、ずっと助けてもらってました」

「田辺です、よろしく願います」

「原です。お噂は賢さんから伺っています」

賢が全員に向かって言った。

「一休みしましょう。随分いろいろなことがあったから、整理しなければね。それに鹿島さんに連絡が取れるかどうか確認しないと。梓、PCでブリクロンさんにコンタクトしてみてくださいませんか？」

「はい、リーダー。わたくしもそのことが気になっていて」

賢は梓がバッグから取り出したPCをブロードバンドルータに接続した。梓は直ぐにPCをONした。ブリクロンから梓宛にメールが来ていた。梓はそのメールを見ていきなり立ち上がり、賢に向かって言った。

「リーダー、大変です！鹿島さんと、チタビオンさんが警察に捕まりました。ブリクロンさんは、何とか逃げ延びたようです」

「えっ!? 鹿島さんが捕まった!? どこで？」

「警察がホテルに捜査に入ったようです。そこで、連行されたと言っています。ブリクロンさんは無事だったようです。直ぐにホテルをチェックアウトして、カルカッタを出て、今はムンバイに居るようです」

「今回のことは、その代償が大き過ぎたな。なんとか鹿島さんたちを助け出さなくてはな」



「爆破事件との絡みがあるので、下手に動けませんね。後はあのふたりが、リスクヘッジの計画通り、当局に対応できるかどうかにかかっているとします。完全に無罪を主張し続けることが、釈放になる大前提です。わたくしは、あのふたりなら、大丈夫だと思います」

梓が言った。賢もそれに応えた。

「僕も、そう思う。あくまでマリー・ジュベステルという女性の後を追跡していると言い続ければ良いのです。あのふたりならできます、必ず」11時を回っている。愛子と原は朝から食事をしていなかった。空腹だと言い出せる雰囲気ではないと思っていた。しかし、亜希子が言った。

「愛子さん、朝のお食事はいただいたのかしら？」

愛子は待ってましたとばかりに応えた。

「いいえ、朝早かったので、食事はしていません」

「それじゃ、わたくしが作りましょう。材料はあるかしら？」

「亜希子さん、お疲れですから、わたしが作ります」

「よろしいのよ。身体はそんなに疲れているわけではないわ。ただ、悲しいだけよ」

ふたりは同時に立ち上がってキッチンに行った。原が言った。

「賢さん、結局、祐子さんはインドにはいなかったんですか？どこか他の国に連れて行かれてしまったのですかね」

「それが、もう一步というところで祐子を連れ戻すことができなかったんです。本当に残念です。みんなの予想だと、多分祐子はアフリカのどこかの国に連れて行かれたようです。亜希子の透視によると、どうやら紛争地域に連れて行かれたようなんです」

「そうですか。ということは、今の状況じゃあのボールも、祐子さんの前に現われることはできないんでしょうね」

「ええ、そうですね」

賢は力なく応えた。今はボールのことに意識を移す気になれなかった。しかし、原はまだボールの話をしたかった。

「賢さん、あのボールにはもう一つの凄い力があるんです。そのことに気付いたんです。あのボールは意識に反応するんですが、意識の通信を

行う時のネットワーク・ルーターの役割を果たすこともできるんです。つまり、こちらから誰かに意識で語りかけようとしたとき、あのボールを使うと相手を見つけて意識を繋げてくれるのです。あのボールを祐子さんに向けて送り出す前に、いろいろ実験したでしょう。その時に今言ったことに気付いていたんです。でも、確証が持てなかったので黙っていましたが、いま僕はあのボールと同じ機能の装置を設計していて、改めてその機能に気付いたんです。だから、もし、あのボールが祐子さんの下に届いていて、祐子さんがそのボールを意識していれば、こちらから祐子さんに意識で話し掛けることができるんです」

賢は初めの内は興味を示さず、ただ黙って聞いていたが、ボールが意識の通信を補助する役目を果たせるという話を聞いて目を丸くした。

「それは凄い。だけど、それもあくまで祐子が意識を働かせている場合でしょう。最近祐子は意識を切り離していることが多いから、その時は駄目ですよ」

「はい、それはPCと同じです。相手がONしてなければ、どうにもなりません」

「これから、毎日ボール経由で祐子に向けて意識を送ってみましょう。上手く通信できれば祐子の居場所もはっきりするでしょう」

亜希子がキッチンから顔を覗かせて言った。

「もしそれが本当なら、誰でも、自分の意識で祐子お姉さまと通信できるのですか？」

「いいえ、それは難しいと思います。やはり、目の前にいる相手に意識で自分の意思を伝えることのできる人でないと、通信はできないと思います」

賢が言った。

「そうすると、やはりここにいる人間だけということだな」

亜希子はソファの近くまで来て言った。

「それは今までとどこが違うのでしょうか？」

「今までは、祐子さんのいる場所の場面を見るとか、あるいは、これは賢さんにしかできませんが、相手の目に映った映像を見るということし

かできませんでしたが、あのボールを経由すると相手にこちらの考えていることを伝えたり、相手の考えを聞いたりできるようになります。それも、よりクリアにできるはずです」

「わたくし、これからできる限り、祐子お姉さまに話しかけてゆきます」賢が言った。

「亜希子、それではものすごくエネルギーを消耗するから、1時間に1回とか、回数を区切った方がいい。お前が参っちゃうよ」

「はい、そうします」

そう応えると、亜希子は再びキッチンに戻った。梓が遠慮がちに言った。

「あの一、原さん、わたくしは科学的なものの考え方しかできないんですが、今のお話は、科学的な理論の裏付けがあるのでしょうか？」

「はい、田辺さん。今の科学を支えている、基本原理を複素次元に基づいた考え方に拡張しなくてはなりません、基本を見直せば、簡単に証明できます」

「証明とおっしゃいますと、数式化できるということでしょうか？」

「はい、それも可能だと思います。ただ、多分その関数は、この地球上では誰も理解できないと思いますが……いいえ、賢さんは理解できるかもしれません。実次元に基づいたものの見方しかできない限り、無理です」

「皆さーん、お食事の支度が出来ました！こちらに来てください」

愛子の元気な声がした。賢は寝室からスツールを持って来て、亜希子の隣に置いて座った。原と梓はそのまま食卓に移動した。カレーライスだった。

「愛子、亜希子、カレーとはいい度胸だな。俺たちはたった今、インドから帰ってきたばかりだぞ。本場インドと勝負しようって言うわけか」

「賢パパ、そうなのよ。亜希子さんと相談したの。面白いでしょう」

「そうなのです。皆さん、お味を比べてみてください。でも原さんと、愛子さんは無理ですわね。ほほほほほ」

久し振りの亜希子の笑い声に、全員心が和んだ。

「亜希子さん、見かけによらず意地悪ですね。ねえ、愛子さん」

原も冗談交じりに言った。全員席に着くと、食事を始めた。カレーの他にテーブルの中央にサラダボールが置いてあり、夫々の席の前に取り皿が用意されていた。カレーを一匙掬って口に含んで、賢が唸った。

「うっ、・・・・・・・・」

愛子があわてて言った。

「賢パパ、何かおかしい？不味いの？」

賢は眉間に皺を寄せて言った。

「う、うん・・・旨い」

「やだ、賢パパ、わたし、ヒヤッとしたわ」

愛子の膨れた顔を見て、皆微笑った。田辺が言った。

「本当に美味しいわ。インドのカレーも独特だったけど、このカレーはまるやかな中にもスパイスが効いて、もっと美味しいわ。何か入れたのかしら」

「はい、一寸隠し味を入れてみました。本当に美味しいですか、田辺さん？原さんはどう？」

「僕はインドのカレーの味は知りませんが、このカレーはいつもより美味しいですよ。ブラックペパーを入れたでしょう」

「原さんは何でもお見通しね。賢パパ、原さんを見習いなさい」

皆笑った。久しぶりの笑いだった。その時、電話が掛かってきた。賢は席を立って受話器を取った。

「はい、内観でございます」

藤代肇だった。

「内観君か、出張ご苦労様。インドの聖人について、いい資料を入手できたかね？」

「ご報告申し上げようと思っていましたが、先にお電話いただき、申し訳ありません。インドの聖人に附いては、今回はクリシュナ神とその信仰者を観てまいりました。勉強になりました。今度のプロジェクトに生かせると思います。社長、奥様にわざわざ空港までいらしていただいて、ありがとうございました。亜希子さんはこちらにいらっしゃいますが、お呼び致しますか？」

「いや、亜希子のことはよろしく頼む。それより、クリシュナ神がプロジェクトの役に立つというのはどういう意味かね？」

「はい、彼の純粹意識が、あの語り継がれている奇跡を起こしたのだと思います。そして、1万年近く経った今も、多くの人の信仰を集めているのは、将に意図されたものだと思うのです。これこそ、今度のプロジェクトで志向すべき方向だと考えます」

「そうか、クリシュナの純粹意識ね。マハー・バーラタは宇宙人と地球人の戦いを描いた叙事詩じゃないのかね？・・・まあ、その話は後でゆっくり聞こう・・・出張は疲れただろう。何か大きな出来事は無かったかね？」

「はい、爆破事件がありました。巻き込まれないように早急に帰国しました」

「そうか、だが、全員無事で何よりだった。明日は一日事務所に居るから、朝、顔を出してくれ」

「はい、わかりました」

賢は藤代が一言も祐子のことに触れないのを不自然に感じた。受話器を置いて席に戻ると、亜希子が心配そうに賢の方を見た。

「亜希子、お父さんからだった。よろしく頼むって」

「父は、それだけのためにわざわざ電話をしてくれたのかしら」

「いや、インドの聖人はどうだったかって聞かれたよ」

「祐子お姉さまのことは何か申していませんでしたか？」

「いや、何もおっしゃっていません」

「可笑しいですわね。一番感心があるはずなのですが・・・」

「明日、社長室に寄る事になったから、その時に話されるのだろう」

皆、暫らくの間カレーに夢中になっていた。食事が済むと、梓はタクシーを呼んでアパートに帰った。全員ソファーに移ると、亜希子がコーヒーを入れて持って来た。原が言った。

「賢さん、もう少しでボールと同じ機能の装置の設計が終わります。試作してみたいと思うんですが、どうでしょうか？」

「やってみましょう。資金は僕が出します」

「賢さん、今度のことで1000万円使ったでしょう。大丈夫ですか？」  
「梓から2000万円借りてあります。まだ1000万円残っているから大丈夫ですよ」

「分かりました。できるだけ費用を掛けないで試作してみます」  
食事の後片付けが済んだ愛子と亜希子がリビングルームにやって来た。  
「ねえ、賢パパ、クリシュナのこと話して。何か面白いことがあった？」  
「愛子、凄かったんだよ。これは皆にも話しておいたほうがいいね。人間には凄く力が秘められているんだということが分ったよ。よく、人間の想像できることは、具体的に実現できることだって言うだろう。あれを実際に行ったのがクリシュナなんだ」

「面白そうね。例えばどんなこと？」  
「ぼくがブリンダヴァンで瞑想したとき、クリシュナになって化け物を退治したんだ。それから、僕に戦いを挑んでいた勢力が、大洪水を起こし、僕たちの村をその水の下に埋めてしまおうとしたとき、村のある丘の片隅を掴んで持ち上げ、洪水をやり過ぎたりした」

「ひえー、そんなことができたの？」  
「リアルな感覚でそんなことを行えたんですか？」

原も興味があるようだった。賢はふたりに説明した。  
「その時は自分がクリシュナだという感覚がしていて、実際に化け物を退治するときは、凄く力が漲っていたし、大地を持ち上げることも可能だった。意識がそうしようと思うと、周りの環境もそれに準じて変わることも分ったよ。だけど、意識が純粋な状態で、しかも集中していて、その場の時空間全体を支配していないと、そんなことはできないと思うんだけどね」

「賢さん、僕も今の話は理解できます。集中したときの意識は原子力より強いパワーを持っていると謂われます。だけど、それは簡単にできるとは思えないんですけどね」

「それが不思議なところなんだ。自分ではそんなに集中して意識を固定しているとは感じていないんだけど、あそこに行った時、ほかの要素がすべて消えてしまって、何故か一つの点を見ているような、そんな感覚

に陥ったんだ。そのくせ全体を見ているんだから、矛盾しているようで、自分の体験している状態を説明できないんだ。つまり、一点が全体のよ  
うな感覚だね」

「一点集中すると、全体が見えて来る。全体を見つめると、一点に向か  
って収束して行く・・・というわけですか」

「直接そんな感覚を持つ訳じゃないんだけど、ニュアンスとしてはそれ  
に近いと思うな。大地を持ち上げたときは、大地と自分は同じで、自分  
が上昇して行くような感覚だった。その時は、上昇という意識しか無か  
った。他の感覚は何も無かったな」

亜希子はじっと聞いていたが眠気が差してきて、ついこっくりとやった。  
愛子が賢に向かって言った。

「賢パパ、疲れているでしょ。亜希子さんも、お疲れでしょう。ふたり  
ともシャワーを浴びて、休んだらどう？」

「そうしようか。亜希子、先にシャワーを浴びるといいよ」

「いいえ、あなたからお入りください。わたくしはあなたの後でいた  
だきます」

賢は亜希子の言葉に従って、バスルームに向かった。原が言った。

「亜希子さん、少し祐子さんに向かって意識を集中して話し掛けてみ  
てください」

「はい、少しやってみます」

亜希子は瞑目した。暫らく動かなかったが、やがてぼつりと言った。

「何の反応もありません。やり方がいけないのかしら」

原が応えた。

「まだ、確認したわけじゃありませんが、実験結果に基づいて通信が可  
能という仮説を立てた訳です。検証が済んでないんです。ただ確率的  
には75パーセント以上の信頼度があると思います。僕は、祐子さんが  
ボールに意識を向ければ絶対できると思っています」

「祐子お姉さまのところにボールが届いているかどうかも分りませ  
んわ」

「わたしね、あのボールはもう祐子さんの所にあるような気がするのよ。

だって、昨日の夜、そんな夢を見たもの」

愛子が言った。亜希子はもう一度瞑目して、祐子に語り掛けた。しかし、何も反応は無かった。賢がシャワーを浴びて出て来た。服をTシャツに着替え、さっぱりとした姿に見える。亜希子が言った。

「あなた、祐子お姉さまと通信してみてくださいませんか？」

「亜希子はやってみたのか？」

「はい、でも反応がありませんでしたの」

「分った、やってみるよ」

賢はソファに腰掛けると、すべての思考を止めて瞑想状態に入った。真っ青な空間に、顔を下に向けて浮かんでいる自分の姿が見えて来た。何も無い。遥か彼方に一本の真横に延びる線が見えた。よく見るとそれは水平線だった。そこが海の上だということが分った。しかし不思議なことに、全く波が立っていない。広大な鏡面だった。海の上に青空が映っていて全体が青いのだ。これほどの快晴なのに、太陽はどこにも見当たらなかった。空に浮かんでいる自分は自然に両腕を上下に振った。それは鳥が空を飛ぶときの羽ばたきと同じだった。賢の身体はどこまでも海の上を飛び続けた。何の変化も無い。ただ、海の上を無心に飛んでいるだけだった。賢は祐子を呼んだ。その呼び声はクワーン、クワーンと音を立てた。泣きながら跳び続けると、泣き声は自然に、クオーン、クオーン、オーン、オーンと変化して行って、オームと響くようになった。オーム、オームと鳴いていると、水平線の上に小さな光が見えた。賢はその光に向かって飛び続けた。その小さな光から木霊が返ってくるようだった。

「あなた、わたしも愛しています。わたしの生き方を観ていて下さい」

賢は確かに祐子の声を聞いた。賢は大きな声で叫んだ。

「祐子、生き抜いているか?どこにいる?.....」

インドで見たような祐子の姿は見えない。賢は光に向かって必死に飛び続けた。しかしその光は何時まで経っても近づいて来なかった。賢は祐子呼び続けた。今度は微かにクワイーン、クワイーンという音が聞こえて来た。その小さな光が何か木霊を返して来ているようだった。賢に



はそのクゥイーン、クゥイーンと聞こえる音が「祐子に繋げない」という応答に感じられた。その音がボールから返って来ているのだと賢は感じた。賢は静かに瞑想から戻った。

「少し祐子が応答したような気がしたが、やはり、繋がらないようだ。しかし、ボールが応答を返しているようだ。原さんの言うようにボールはルーターの役割を果たしているように感じた」

賢と亜希子は諦めて休息を取ることにした。原は愛子と一緒に、バレエスクールに出掛けることにした。亜希子は眠そうに欠伸をしながらバスルームに向かった。賢はソファの上で瞑想を続けた。インドでの出来事を振り返って省察を行った。その省察を通して、賢は祐子とのすれ違いが、起こるべくして起きていると感じた。まだ、努力が足りないと感じられた。その時ふと、やわらかい感触が頬に触れた。静かに眼を開くと亜希子の髪が頬に触れていた。亜希子は身体にバスタオルを巻いたままで、身体をこごめて賢を覗き込んでいた。頬に触れている髪もしっとり濡れていた。

「あなた、シャワーをいただいたら、眠気が覚めてしまいました」  
賢は亜希子の手を取ってそのまま、寝室に連れて行った。亜希子は悲しみを忘れようとするかのように、必死に賢に縋り付いてきた。  
翌日の月曜日、賢は業務の遅れを取り戻す為に遮二無二動いた。朝、藤代肇の部屋に行くと、藤代は再び、どうしてクリシュナを調査対象にしたのかと、賢に質問を投げ掛けた。賢の回答では腑に落ちないようだった。

「インドは、多くの聖人を輩出しているだろう、どうして、クリシュナを調べたいのだ。わたしには、クリシュナは架空の人物のようにしか見えない。特にバカバット・ギータに書かれているアルジュナとの対話で、クリシュナが親戚の者と戦うように説いているところが、どうしても解せない。正義の為なのか？運命なのか？それに怪物を倒すときのクリシュナの姿も阿修羅のようで、凄みがある。そういう部分があるから、今度のプロジェクトで目指している「精神性を改善する」というところでどう合致するのかどうしても合点がいかない。もっと他にも調べるべき

人物がいるんじゃないのか？例えば、パラマハンサ・ヨガナンダとか、タゴールとか、ガンジーでもいい。神のような存在なら、ブッダでも良いだろう」

「社長、わたくしは、インドという国は確かに聖人もいますが、その逆で最も醜い部分も持っているように思うのです。今度のプロジェクトでは人々が意識を高める方向に自己改革するのを推進するのが目的ですが、そうするとその対極にある要素が必ず表面化して来ると思うのです。インドではその一つがカースト制度であり、また現象化しているものとして、汚職や人身売買という負の要素があると思います。そんな中で人々が縊り、求めているのは絶対的な力と愛であると思うのです。それを有するのがクリシュナだと思います。少し現実離れしているように見えますが、人々の心の中にはクリシュナが住んでいます。そして、それが1万年経った今も現実に奇跡を呼び寄せています。僕は、奇跡ということ事態に重点を置いてはおりませんが、人々のクリシュナに対する傾注はそれほどまでに強いものだと思えました。今度のプロジェクトで、もしかしたら、あのクリシュナのような、大勢の人々を惹きつける要素を、どこかに盛り込む必要があるのではないかと考えたのです。対極に現われた否定的要素や悪的要素をどのように抱擁していけるかが、成功の鍵だと思います」

「うむ、なるほど、そういう面を見ようとしたのか。しかし、最初から負の要素を包含させようとするのは、主客転倒じゃないか？」

「勿論、意識の改革を強く推進しなければならないと思いますが、その反動で現われることが予想されるリスクを見極め、それをどのように回避するか検討し、それを方向転換させる対応策を策定して仕組みに内包させる必要があると思います」

「わたしには少し歯痒く思えるが、まあ、君はリーダーだから、自分の正しいと思う方向に突き進むのが良いだろう」

「あの一……社長、祐子さんのことですが、今後どのように対応すべきとお考えでしょうか？」

「……うむ、わたしも個人的には調査会社に捜索させているが、

社としても対応を図る必要があるな。だが、そのことでプロジェクトを遅らせる訳にはいかない。当社に対する攻撃が今後も起きて来るだろうが、それらの攻撃に対して防衛線を張っておく必要はある。君たちが出張する前に検討して出した結論を具体的に実行し始めてから、大きな問題は起きていないだろう。それは継続してゆくべきだな」

「はい、そのリスクマネージメントは継続するとしても、祐子さんのことは既に起きてしまったことです。今後、どういう手を打って行くかということですが・・・」

「君はどの程度の情報を掴んでいるのかね？」

「誘拐されて、インドで売られたらしいというところまでは分ります」

「どうして、インドで売られたと考えているのかね」

「はい、逮捕された誘拐犯、小山田や漁船に乗っていた子分たちの自白内容から見ても、インドで売られたのは間違いないと思います」

「そうか、それなら、わたしが掴んでいる内容とほぼ同じだな。新しい事実が分ったら教えて欲しい」

「はい、分りました」

賢はそう言って社長室を出た。透視やボールでの追跡に附いては、口を閉ざして一切触れなかった。直感的に藤代に話すべきではないと感じていた。社長室を出ると、一旦プロジェクトルームに戻った。楠木と決済待ちの事項について打ち合わせを行った。楠木は、ステアリングチームへの報告が必要だと言った。賢は報告会に出席することになった。梓が報告書を纏めてあった。賢は本当にありがたいと感じた。自分は祐子の中に捕らわれていて、報告のことを念頭に置いていなかった。梓の機転に心の中で礼を言った。勿論梓がそれに反応するはずもなかったが、梓は賢の嬉しそうな表情に、喜びを覚えているようだった。梓の報告書は的確だった。インドの調査目的を「プロジェクト推進における国民の反応に附いての検証」と題してあり、副題に「インドに於ける国民の絶対的信仰とその対極的事項」と記されていた。内容は、賢が事前に梓に説明した内容を主体に置き、ムンバイでの独自の調査内容ーガンジーやブッダを受容する国民性ーについて追加記載してあった。梓のレポート

を用いて行った説明は、ステアリングの反応を2分した。半数は非常に感心したが、半数は国民を感化させる方法論的な内容が薄いとの見方をしていた。それは賢の説明したガンジーの話から、なぜガンジーがインド全体を、無抵抗主義などという消極的な方法で掌握できたかをもっと詳しく調査すべきだったと感じた為だった。賢はその質問には、ガンジーのケースは過去にNHKなどで放映されており、既に公知の内容なので、今回は省略したとの答弁で一応その場は収まった。突然の報告会への対応がスムーズに行えたので、楠木も賢に敬意を表わしていた。そのほかにも個別に専務からの呼び出しがあり、午前中は報告や説明に追われた。午後は経理部長との予算案についての打ち合わせと、仕様の内容を確認する為の楠木との打ち合わせがあり、仕事を終えて帰宅したのは9時を回った頃だった。賢はアパートまで梓を送った。この日は疲れていた為、タクシーを使った。梓が是非見せたいものがあるので、少し寄って行って欲しいと言った。賢は疲れを省みずに頷いた。部屋に入ると梓は直ぐにコーヒーを入れた。

「リーダー、今日会社でも、タクシーの中でも話せなかったんですが、ブリクロンさんからのメールが届いているんです。そして、今日の8時半にも新たに1通、来ることになっているんです」

「梓、何から何まで、済まないな。君のおかげで、何とかこの艱難も乗り越えられそうだ」

「そんなことはおっしゃらないでください。わたくしはリーダーの女房・・・役ですから。一寸こちらにいらしてください」

コーヒーカップを片手に、梓は開きっぱなしになっているラップトップPCの電源を入れた。PCが立ち上がると、梓は直ぐにメールソフトを開いた。30通ほどの受信メールが表示され、スパムメールが自動的に削除されて10通ほどが残った。梓は受信メールホルダをそのままにして、迷惑メールのホルダを開いた。そこに2通のブリクロンからのメールがあった。梓は先ず昨日のメールから開いた。入金のお礼と、鹿島とチタビオンはまだ釈放されていないが、希望が持てそうだという内容だった。次に、梓は今日のメールを開いた。ブリクロンは警察の友人から

情報を得ているとのことで、鹿島とチタビオンがマリー・ジュベステルを追っているということを主張しているが、それなる人物はふたりのでっち上げの疑いがあると見なされて、警察は無実がはっきりするまで拘留を続けるようだと説明していた。ブリクロンは日本からICPO（国際手配事務局）を通じてマリー・ジュベステルの国際情報照会手配書（青手配書）を申請して欲しいと言っていた。更に、祐子に附いて国際行方不明者手配書（黄手配書）も同時申請した方が良いと言っていた。賢と梓は顔を見合わせた。インドに出発する一月前に福岡県警が黄手配書の申請を済ませていた。しかし、まだインド警察署がそれを認識していない可能性もある。ブリクロンは鹿島とチタビオンが爆破の嫌疑に極端に警戒心を働かせて、祐子を探していることについては警察に話していないようだと言っていた。日本からマリー・ジュベステルの国際情報照会手配書が申請されると、インド警察も鹿島やチタビオンへの嫌疑を弱めるだろうとのことだった。ふたりは早速明日、警視庁と相談して申請手続きを進めることにした。梓が言った。

「ICPOは本部がフランスにありますし、追跡するのもフランス人ですし、東アフリカの国ルワンダの大量虐殺はフランスが絡んでいるという噂もありますし、何となく、フランスの色を感じますね」

「そうだね。どこかの国の政府が絡んだりしていなければ良いのだけれど。もしそんなことになっていたら、益々難しくなる」

ブリクロンは祐子の消息について考えられることを述べていた。祐子は小型飛行機を使って、ルワンダの奥地に連れて行かれたようだと言っていた。内戦が続き、人々の生きる意欲が失われ、慢性的に食糧不足に陥っている国に慰安婦として送り込まれた可能性が強いと書かれていた。

「祐子さんを救出するには、覚悟が必要です。検討不足で救出を強行しようとしたら、救出どころか命の保障も無いでしょう」

「梓、どうして、祐子がこんな状況に遭遇するか分かるか？」

「いいえ、リーダー。どうしてとか、理由があるのですか？」

「うん、祐子にはそういうミッションが与えられているようだ。俺にはとても耐えられそうもないミッションだが……。しかし、俺は生き

ている限り、祐子を救い出す為に行動する。俺は祐子を愛しているし、そもそも自分がこの誘拐事件の原因の発端になってしまったからな」  
梓は黙って頷いた。

「兎に角、明日は僕が一番で警視庁に寄って相談して来るよ。警視庁はお役所だから、ICPOに青手配書を申告する場合のマリー・ジュベステルの嫌疑の確証を求めるだろう。それが問題だ」

「それは、わたくしが、ブリクロンさんから彼女に関する情報を取り寄せてコピーします。明日の朝までに何とかしますから、朝、どこかで待ち合わせしましょう？」

「9時にJR有楽町駅の日比谷口で待ち合わせよう」

賢はアパートに帰った。ドアを開けると愛子が駆け寄って来た。

「ただいま」

「賢パパ、お帰りなさい。今日、原さんの研究会の方が二人尋ねてきたのよ。面白かったわ」

「いつ？」

「さっき、原さんと一緒に帰ったわ」

「誰が来たの？」

「勾島さんという方と、弓張さんという方よ」

「何しに来たのかな？」

「原さんが呼んだようなの」

「大丈夫かな、原さんが東京に居ることが知れちゃうのに」

「それは大丈夫みたい。3人とも秘密だって言ってたから。それより、賢パパ、夕飯はまだでしょう？」

「うん」

「わたしは、原さんやお客さんと一緒にいただきちゃったわ。ごめんなさい」

「僕が遅いときは、そうするように言っただろう。謝ることないよ」

「今、支度するわね。その間にお風呂に入っていて」

賢は愛子の心がすっかり安定してきたことに、安堵感を抱いた。シャワーを浴びて出て来ると、夕食の支度が出来ていた。チャーハンとポテト

サラダ、わかめスープだった。愛子とゆっくり話すのは、久しぶりだった。愛子もテーブル席に座って、茶を飲みながら賢の話し相手になった。

「賢パパ、わたしね、今度のお休みに、前の父に面会に行ってお来ようと思うんだけど……賢パパ、いいかな」

「愛子、よく気が付いたね。僕も前のお父さんのことは気になっていたんだ。もう、刑期も確定しているから、お父さんも自省の念で苦しんでいるかも知れない。愛子に会ったら喜ぶだろう」

「うん。賢パパ、交通費はどうしたらいいかな？」

「生活費から出しておきなさい。その分来月は多めに渡すからね」

「賢パパ、ありがとう……賢パパ、今日のお客さん、わたしの作ったチャーハンを美味しいって言ってくれたのよ」

「愛子、お前のチャーハンは本当に美味しいんだから、みんな褒めるさ」

「わたし、他所（よそ）の人にご飯を出してあげて、褒められたんで、照れちゃった」

「そうか。そう言えば、僕の居ないときに、お客さんに食事を差し上げたのは初めてなんだね。よく気が付いたね」

「うん。賢パパ、あの人たち、原さんと面白い話をしていたわ」

「そうか、どんな話？」

「映像信号とか言っていたわ。3人で死んだらどうなるかなんて、ちょっと不気味な話をしていたんだけど、弓張さんが、「死んだ後のことがテレビで観れたら、皆生き方が変わるんじゃないかな」って言ったの。そしたら、原さんが、今、高次元を認識できる……確かセンサー……とか謂ったわね、それを開発しているって言ったの。そしたら、ふたりが眼を丸くしたのよ。勾島さんは、もう驚いて立ち上がりそうになったわ。それで、「それは現在の科学に裏づけされた材料で作れるのか」って聞いたの、そしたら、ここからが面白いのよ。原さん、何て答えたと思う？「そのセンサーは水で出来ているから、いくらでも手に入る」って言ったのよ。そのセンサーを頭に付けるんだって。頭に育毛剤みたいに付けて、そこから有機プラスチックでその上を擦るんだって。そしてそれを頭に固定するの。するとセンサーが脳の振動を受けて、それが

有機プラスチックに伝わって、それを電気信号に変えるんだって。その後の話は難しく、わたしはこのへんまでしか分らなかったけど、勾島さんが「そのセンサーの液の成分に育毛剤の成分を入れられないか」って言ったの、それから3人で大笑いしながら、話し込んでいたわ。わたしには話がちんぷんかんぷんで、それにわたしはチャーハンを作り始めたから、その後は良く聞こえなかったの。食事になって、チャーハンを褒めてくれてから勾島さんと弓張さんが、「この上手い味は何色だろう？」「黄色だ」「オレンジ色だ」なんて言ってまた大笑いをしていたわ。3人ともとても楽しそうだった。わたしも嬉しくなっちゃったわ。賢パパ、何の話をしていたのか分る？」

「うん。多分、原さんはボールの機能を持った装置の話をしていたんだと思うよ。だけどそれだけじゃないな。その機能に、人間の脳から霊界の信号を引き出す機能を追加しようとしているんじゃないかな」

「ふーん。賢パパの話も分らないわね。霊界って、人間の周りの世界でしょう。どうして、人間の脳から信号が取り出せるのかな？」

「今までの常識はそうになっているけど、僕がいつも言っているだろう。この世界のすべての情報の元は自分の中にあるって。この世界が写像だって。愛子もそれは分かってきただろう？」

「うん。だけど、それは脳なの？もっと奥なんじゃないかと思っていた」

「もっと奥だよ。それを脳がキャッチして翻訳するんだよ。だから脳の信号を分析すれば、霊界の情報も、多次元の情報も取り出せるはずなんだ。ただ、人間はまだ、それを自分で取り出して、認識する力が無いんだ。原さんは、それを機械にやらせようとしているんじゃないかな」

「ふうん、そうなんだ。原さんって頭が良いんだね。賢パパとどっちが頭が良いかな？やっぱり、賢パパかな？」

「原さんのほうが頭が良いよ。僕にはそんな考えは浮かんで来ないからね。あの人の頭の構造は、普通の人間のものじゃないように思えちゃうね。鹿児島の子供の中には、原さんのことを宇宙人だと思っている子供もいるらしいよ」

「へえー、原さんって凄いんだ。わたし、益々尊敬しちゃう」



翌日の警察での説明には、賢も梶子摺った。ブリクロンの送ってよこした資料は英文の資料だった。有楽町駅の改札口で梓はさらっと言った。「リーダー、良い資料が手に入りました。英文ですけど、警察が読めば必ず彼女が人身売買に関係していたと理解するはずですよ」

しかし、警視庁の係官はその資料を簡単には理解できなかった。その文章が、マリー・ジュベステルの経歴を中心に書かれていた為で、ルワンダの大量殺戮事件の時に、何人かの男女を拉致、誘拐してルワンダ国外から紛争地域に連れて行き、特殊な仕事をさせていたことをICPOが掴んだという情報だった。表現が特殊な人名、地名で埋められていた為、係官の理解力の限界を超えていたのだった。係官のプライドも手伝って、他の人間に支援を要請しなかった為に時間が掛かった。昼頃になって、漸く係官がギブアップして、アフリカ情勢に強い男性に支援を要請したので直ぐに資料が理解された。それからはICPOにマリー・ジュベステルの国際情報照会手配書（青手配書）を申請する方針がスムーズに決まっていた。「翌日には提出できると思う」と係官は言った。

それから1週間して、漸くインド警察が、日本からマリー・ジュベステルの国際情報照会手配と祐子の国際行方不明者手配が行われている事実を認識し、鹿島とチタビオンが釈放されることになった。それを察知したブリクロンから直ぐに梓に連絡が入った。鹿島が帰国したのは更にその1週間後だった。賢は梓と共に成田空港に鹿島を迎えに行った。EXITから姿を現した鹿島はすっかりやつれていて、疲労が身体全体に現れていた。

「ご苦労様でした。開放されて本当に良かった」

賢が言った。

「大変でしたね。でも漸く解放されて本当にほっとしています。ブリクロンさんが随分努力してくださったようですよ」

梓も言った。

「分かっているっすよ。今度ばっかしは打つ手がなかったっす。言葉は通じないし、最初から犯人扱いだし。ああ、しんど」

「どこかで休んで行きましょう」

「直ぐにシャワーを浴びたいす。金使わしちやって申し訳ないす」

「何を言うんですか。あそこまでできたんだから、今回は半分は成功だと思えます。祐子の場所も特定できそうだし」

「今度は、もっとむずかしいっすよ」

「いろいろなことを整理してみたいし、いずれにしても、先ずは僕のアパートに行きましょう。シャワーも浴びられますから」

「サンキューす」

3人は京急で先ず西日暮里駅に出て、それから地下鉄千代田線に乗り、大手町で乗り換えて、やっと門前仲町に着いた。鹿島は乗り換えのときに眼を開けるだけで、電車に乗っている間はほとんど眠っていた。その間、賢は声を抑えて梓とプロジェクトの話をしていった。梓は賢がずっと傍に居ることで心が弾んでいた。プロジェクトが大分進んできていることをふたりは意識していた。ふたりの業務は多忙を極めてきていた。既に霞ヶ関の認識も固まってきたように見える。今年の家計予算の中に埋め込まれているプロジェクトの予算は1000億円規模だった。この金額を捻出するのに各省庁が四苦八苦しっていると聞いていた。極秘で国家プロジェクトを進めることの難しさはここにあった。最も矢面に立たされたのは国土交通省だった。MIプロジェクトの費用は道路建設調査費用の中に50億円盛り込まれていた。その金額に附いて事業仕分けの会議の中で具体性の乏しさが追求された。大臣は全国に設置を予定している地域交流センターの建設費用200億円の中にこの金額を埋め込んでいた。具体性の乏しさが逆に事業仕分けグループの注意を逸らせる効果を生んでいた。そのほかの省庁も夫々独自の工夫を強いられていたが、いずれも見通しがついていた。霞ヶ関から、1000億円の予算の使い道に附いては、あまり表面化させてはいけないという通達が出ていた。マンションに着くと、賢は鹿島に直ぐにシャワーを使うように言って、買い溜めしてある新品の下着を渡した。鹿島は恐縮していたが、賢の指示に従った。鹿島がシャワーを済ませてソファのところに帰って来ると、賢は言った。

「鹿島さん、一寝入りしますか？」

鹿島は電車の中で休んだことで、幾分元気を取り戻していた。

「大丈夫っす。それよか、金のことを決めないと……」

「もう、ブリクロンさんに約束の金額は払いましたけど……」

「いや、計画は失敗だったでしょう。だから、俺が払うっす」

「鹿島さん、これは僕のやるべきことです。だから、結果の如何に関わらず全額僕が支払います。鹿島さんには、いろいろお世話になり、ありがとうございました」

「賢さん、それは無いっしょう。おれのミッションなんだから、当然俺が金を出すに決まってるっす」

「いや、それは絶対に譲れません。祐子は僕のフィアンセですから」  
その言葉に、賢の方を向いて話を聴いていた梓が視線を下に落とした。  
鹿島はやっと諦めた。

「わかりった。今度はいいっす。だけんど、アフリカは俺が自分でやるっす」

「アフリカは危ないから、よほど準備をしてからでないと身に危険が及ぶかもしれませんよ」

「知ってるっす。ウガンダは可哀想な国っす。ウガンダの為にも、絶対やるっす。祐子さんを助け出して見せるっす」

「何か、戦略があるんですか？」

「まだ、秘密っす。今言っちゃうと、また賢さんにおんぶしちゃうから、まずいっしょ」

「鹿島さん、今度は、あまり過激な方法は取らない方が良いと思います。多分相手は武器を持っていますから、我々のような丸腰では、簡単にやられてしまうでしょう」

梓が口を挟んだ。

「鹿島さん、ウガンダの部族に潜入するつもりなんじゃないの。殺されちゃうわよ」

「そんなことはしないっす。まあ、見ててくんさい」

賢と梓は鹿島の言葉に一抹の不安を覚えた。「気分がスッキリしたので

帰る」と鹿島が言い出したので、賢と梓は鹿島を上野まで送った。ふたりはそれから会社に戻ることにして山手線に乗った。賢が梓に言った。「お金は毎月25万ずつ振り込んでゆくよ。ボーナスでは100万ずつ、2年ちょっとで返済できるな。利子は定期預金の複利で返すよ」

梓は「利子など要らない」と言ったが、賢は「そうしないと気が済まない」と言った。ふたりは一旦東京駅に出て会社まで歩いた。

この日はあまり忙しくなかった。楠木は北海道の友人の結婚式に出席する為に休暇を取っていた。賢と梓は定時の6時に退社した。梓が自分のアパートに寄って行って欲しいと言った。賢にブリクロンとの交信記録を見せたいと言った。

ブリクロンは梓に対して、毎日メールを送ってきていた。賢も梓から時々報告を受けていたが、それは特に祐子の消息に関することだった。梓は祐子のこと以外の情報を賢に見せたかった。

「リーダー、ブリクロンさんは喜んでます。インドの政府が売春行為に対して本格的な規制に乗り出すようです。売春と一部の資産家の行ってきた性的搾取への取り締まりを強化するようです。あの爆破事件で、売春組織やハーレムを持っている資産家が警察や政府に影で圧力を掛け始めたのですが、それが裏目に出て、ある勇敢な若手議員が国会でその事実を暴露してから事態は急変し、今迄金の力で権力に取り入れてきた悪の組織が国会の討論で矢玉に挙げられるようになってきたのです」

「それは凄い。あの爆破行為自体は決して褒められたものじゃないが、その結果、事態が良いほうに転んでくれたのなら本当に嬉しい」

「それに、ブリクロンさんはとても嬉しい話をしてくれました。これまで売春宿に対して人身を売り捌いていた組織の頭が、当局に拘束されたとのことで、カルカッタで救出した二人の女性を自宅に連れて帰れたとのことです。あの二人の女性は「さくら」をすらすら歌えるようになっていて、ブリクロンさんが紹介した臨時社員として働いている間も、仲間に「さくら」を教えていたようです。その歌に人気が出てきて、いまカルカッタでは「さくら」を歌う歌手まで現われて、ちょっとした流行歌になっているとのことです。インドの民謡と日本の民謡はトーンが似

ているから、もしかすると「さくら」もインド人には受け入れられやすいのかもしれませんが。その二人が先週自宅に戻った時、家の者たちが、自省の念で娘の顔をまともに見ることができなかつたらしいのですが、彼女たちはブリクロンさんの呼び掛けで集まった娘たちの家族と、親戚の者たちの前で、あの「さくら」を歌ったんです。その声が美しく澄んでいて、集まった人たちは皆涙を流したそうです。その時、娘の一人が祐子さんの話をしたのだそうです。皆涙を拭きながら娘たちの話を聴いていて、それはきっと愛と慈悲の女神ラクシュミーの生まれ変わりに違いないと言って祐子さんを称えたそうです。初めは俯き加減だった家族も次第に表情が喜びに満たされていったとのこと。ブリクロンさんはその2日後に20本の桜の木をデリーで手に入れて、その村に持参したそうです。それを植えるように二人の女性に伝えたとのこと。二人の女性は家族に喜びを与えてから、再びブリクロンさんと共にムンバイに戻ったということです」

「素晴らしい話だね。祐子の愛はそれほどまでに皆に力を与えるんだな」

「はい、わたくしもその話を聴いて、あの誘拐漁船での祐子さんのことを思い出し涙がこぼれました。ブリクロンさんも、「祐子さんを絶対に救い出して見せる」とおっしゃっています。でもその後で、ブリクロンさんは、「我々も努力するけど、多分祐子さんはご自分で道を切り開かれるだろう」とも言っていました」

## ルワンダ

祐子はホテルの部屋に入ると、久しぶりに気持ちが安らいできた。部屋には小テーブルがありその上に、パンとジュースそれに紙の皿の上にローストビーフ、野菜サラダ、切ったマンゴーがラップされて置かれていた。フォークとナイフはプラスチック製で使い捨てのようだった。それを見ると途端に空腹感を感じて、祐子は椅子に座るといきなり食事を始めた。パンもサラダも、ローストビーフも全てがこの世の物とは思えないほど美味だった。祐子はあっという間にテーブルの上のものをすべて

食べつくしてしまった。食事を済ますと、祐子は直ぐに浴室を覗いてみた。シャワーとバスタブがある。久し振りにバスタブに入ってゆっくりしたかった。コックを捻って一旦ベッドに戻ると、そのままどっと身を投げた。祐子は知らないうちに眠りに落ちていた。電話のベルの音で気が付いた。受話器を上げると、電話の向こうで怒鳴っている声がする。祐子はハッとした。「I'm sorry.」と言って電話を切った。バスルームは水浸しだった。祐子は直ぐにコックを止め、さっさと裸になるとバスタブに飛び込んだ。湯がどっと流れ出た。とても気持ち良かった。すべての苦しみが洗い流されてゆくようだった。暫らく湯に浸かってボーっとしていると、今度はドアをノックする音がした。祐子は湯から上がると、簡単に身体を拭いて、バスローブを身に付けて扉のところに行った。ドアの外で誰か男が怒鳴っている。祐子は言った。

「I'm so sorry. I just finished the bath, and stopped water overflowing.」(すみません。今入浴を済ませ、水が溢れるのも止まりました)

男は何かぶつぶつ言っていたが、そのまま立ち去った。祐子は自分に向かって言った。

「しっかりしろ、祐子！自分の意識を生起させろ！」

祐子はバスルームに戻ると、バスタブの栓を抜いた。意識は正常なときの自分に戻っていた。備え付けの化粧水で簡単に化粧を済ますと歯を磨き、口を濯いだ。日本に居たときにやっていた習慣どおりのことを行った。祐子は長い間変えていなかった下着を洗った。花柄のワンピースは濡れタオルで拭いて、備え付けのブラシで表面を整えた。靴も随分汚れ、傷だらけになっていた。靴磨きのセットは無かった。ティッシュペーパーを濡らして汚れを落とし、乾いたタオルで磨いた。そこまでやると、一層気分がスッキリしてきた。祐子は食事の後片付けを澄まし、ゆっくりベッドに腰掛けると、備え付けのテレビのスイッチを入れた。UNNチャンネルがあった。祐子は「こんな僻地にまでUNNが放送されている」と思って、「ここは僻地なのだろうか？」と思い直した。キャスターがインドの爆破事件の説明をしていた。4つの建物の入り口付近が爆

破されたと説明している。祐子は「おやっ？」と思った。映像に映し出された建物は、祐子のいたハーレムのある建物だと思った。どうして、記憶に残っているのか分らなかったが、確かにあの建物だった。乱暴に扱われながら建物から引き出されて、後ろを振り返ったときに見た青色の壁の建物だった。祐子が引き出されたとき、建物の1階には誰も居なかった。キャスターの説明から判断すると、祐子が連れ出されて2時間ほどしてから爆破が起きていたようだった。どうして2時間後だと分るのかも不思議だった。それが誰かに爆薬を仕掛けられて爆破されたことも分った。キャスターが説明したわけではなかった。爆弾を仕掛けた男が小柄なインド人だということも分った。そして、頭に賢の姿と、どういう訳か鹿島康介の姿が浮かんだ。イメージははっきりしないが、それが賢と康介だということは直ぐに分った。祐子は思った。

「あのひとと鹿島さんが仕掛けたんだ。わたしを助けに来たんだ」

祐子は嬉しくなった。そして、誘拐されるのもまんざらじゃないと、妙なことを考えた。急に眠気が襲ってきた。祐子は、今度は意識をしっかり保った状態で、テレビを消し、ルームライトを落とすと、バスローブを脱ぎ一糸纏わずにベッドに潜り込んだ。心地よい、深い眠りが待っていた。

翌日は電話のベルで起こされた。昨日のフランス人の夫人だった。下のレストランに降りて来るように言われた。祐子は身支度を整えると、ティッシュボックスの蓋を破って中のティッシュペーパーを鷲掴みにすると、ワンピースのポケットに押し込んだ。それから直ぐに部屋を出た。まだ下着が濡れている感じがしたが、歩いていると次第にその感覚も薄れてきた。ロビーに降りると婦人が待っていた。昨日一緒だった3人の女性も夫人の横に立っていた。婦人が言った。

「おはよう、気分はどう？」

「はい、疲れが取れました」

「昨日、お湯流したままだった？」

「ごめんなさい」

「ホテル、怒っていた。でも大丈夫。さあ、行こう」

朝食は普通のbuffetスタイルの食事だった。祐子は喜んで食事をした。今まで食べなかった分を取り戻そうとしているかのように沢山取った。ソーセージは4本も取り、卵は山盛りに取った。パンはクロワッサンを3つ取った。コーヒーはウエイターが給仕してくれた。祐子はウエイターに「Thank you.」と笑顔で言った。その言葉は心地良く自分の中で響いていた。

朝食が済むと既にチェックアウトは済んでいるようで、そのまま婦人に附いてエントランスから外に出た。3人の女性は昨日と同じ逆さ茄子の運転する車に乗った。祐子だけは夫人と一緒にアボガドの運転する小型車に乗せられた。2台の車は途中まで一緒に走っていたが、逆さ茄子の車は途中の交差点を左折して分かれて行った。1時間ほど走るとアボガドは大きな平屋のバラックの前に車を横付けした。婦人に促されて祐子は車を降りた。婦人は祐子を連れてバラックの建物の中に入って行った。広い場所だった。地面に直接わらのような草で編んだ敷物が敷かれていて、あたり一面に大勢の人が横になったり、座ったりしている。人と人との間に隙間はほとんど無い。どうやら怪我人と病人を収容する場所のようだった。包帯を巻いているもの、横になって唸っているもの。皆悲惨な姿だった。まだ怪我をしたばかりのような者も多く居た。祐子は婦人の後に附いてバラックの中をまわった。婦人は一言も話さなかったが、黙って祐子にこの情景を見せるつもりのようなようだった。横になっている人たちの間にある狭い通路を歩いて行くと、奥の隅に一人の少年が横たわっていた。少年は左足が大腿部で切断されていて、その足には包帯が巻かれている。少年は動かない。祐子はその少年のもとに寄ると、跪いて少年の頭に触れた。祐子の眼から涙が流れ落ちた。祐子は少年の頭を撫で、背中を摩った。涙が溢れ出てきた。婦人が黙って祐子の肩に手をかけた。祐子は立ち上がった。そこから少し行くと今度は狭い廊下に出た。廊下とは言っても下は土である。行く手にドアが6つあった。婦人は一つ目の部屋のドアを開けた。婦人が言った。

「ここ、あなたの部屋。ここで生活する」

祐子はただ、「はい」とだけ答えた。



そこは薄暗く、奥にベッドが一つあるだけの部屋だった。壁には小さな窓が一つ付いていた。婦人は祐子に少し休むように言うとその場を立ち去った。祐子はベッドにどっと身を投げた。無性に眠かった。どうしてこれほど眠いのか分らなかったが、自然に眠りに落ちていった。

激しくノックされるドアの音で眼が覚めた。起き上がって扉を開けると、そこには上半身裸で、パンツを1枚履いているだけの目の大きな少年が、泣きながら何かを訴え続けている。

「Msaada, Mama yake ni mgonjwa」(助けて、かあさんが、病気だよ)  
祐子は意識をその場に戻した。少年は祐子に附いて来るように言っているらしい。少年は祐子の手を引くと、小走りで駆け出した。祐子も引張られながら駆けた。建物の外に出ると、そこに一人の女性が倒れている。辺りは一面の砂地で、所々に灌木が立っている。祐子は、「ここは砂漠なんだ」と思った。倒れている女性の周りから2メートルほど離れて7、8人の女性達はその女性を囲んで立っている。誰も手を出そうとしない。少年は祐子を連れて女性のところに行った。女性は苦しがついて、焦げ茶色の顔にもその蒼白さが分った。祐子は苦しそうな呼吸と嘔吐をもよおしている様子から、女性が何かを喉に詰まらせているのだと思った。横になっている女性に近づき、身体を抱き起こして背中を摩った。暫く摩っていたが、女性は一向に良くなる。祐子は女性の背中に回って、両手で勢いをつけて背を強く押した。その衝撃で女性は口から黒い塊を吐き出した。塊りに続いて、黄色い液も吐き出した。女性は咳き込んだ。祐子は女性の背中を摩った。辺りに酸っぱいような異臭が立ち込めた。観ていた女性たちはさらにそこから1メートルほど遠ざかった。それでも祐子達の方を凝視して、成り行きを見守っている。祐子は言った。

「あなた、しっかりしなさい。もう大丈夫だから。しっかりしなさい」  
少年が駆け出して行くと、直径15センチメートルほどの器に水を入れて持って来た。祐子が見るとそれは汚れた水だった。祐子は少年にコップで水を飲むジェスチャーをして見せてから女性を指差した。少年は理解したようだった。祐子はポケットからティッシュペーパーを取り出す

と、少年の置いていった水を含ませて、女性の汚れた口の周りを拭った。更にもう一枚取り出し濡れたところを拭き取った。女性の顔の汚れは落ちた。祐子はもう一枚ティッシュペーパーを取り出し、女性の衣類の汚れも落とした。それから少年を待っている間、女性の背中を摩っていた。やがて少年が小さな陶磁器の器に水を入れて持って来た。やはり、水はそれほど澄んでいるようには感じられなかった。祐子は自分がそれを少し口に含んでみた。何とか飲めそうに思えた。祐子はその器を女性の口に持って行って水を飲ませた。女性は初めむせたが、やがてそれを飲んで息を大きく吐いた。祐子は女性が自力で立てるかどうかに見ている。女性は少年に捕まるようにして立ち上がった。部屋に入ったときに、婦人がくれたパンがベッドの脇のトレイの上に置いてあったのを思い出した。祐子は二人を連れて、先ほどの部屋に戻った。部屋に戻ると、パンを取って来て、部屋の外に待っている女性にそれを与えた。女性はそれを半分息子に与え、残りの半分を手にしてその場で食べ始めた。よほど空腹だったと見えて、ふたりはががつと食べた。祐子は微笑んで見つめていた。やがてパンを食べ終わるとふたりは微笑を浮かべてじっと祐子を見つめ、祐子を指差して、それから自分の胸を指差した。

「Jina lako?」(あなたは何という名前ですか?)

祐子は自分の事を聞かれていると思い、自分の胸を指差して言った。

「Yuko, Yuko. Japanese」

母親はびよこつと頭を下げると、少年の手をとってそのまま踵を返し、その場を立ち去った。祐子は扉を閉めて、再びベッドに腰掛けた。そこで初めて自分の指も汚れていることに気付いた。しかし、その汚れを拭う水が無かった。その部屋にはシンクも無かった。祐子は仕方なく、ポケットからティッシュペーパーを1枚取り出し、指に唾を掛けて汚れを拭った。祐子は少年が何故病室の介護人を呼びに行かなかったのだろうと考えた。暫らく考えを巡らせていると、また疲れが押し寄せて来て、いつしか眠りに落ちた。

外の騒がしい音に気付いて祐子がベッドから身体を起こしたのは、もう窓の外が薄暗くなった時だった。騒がしいのは外を駆けてゆく人の足音

だった。祐子は起き出して扉を開けてみた。2つ先の扉を開けて人々が中に入って行く。婦人が食堂だと言った場所だった。祐子も「食事を取らなくてはならない」と思い、外に出て2つ目の扉から中に入った。扉の向こうは50㎡程の空間で、そこには木のテーブルと椅子が所狭しと置かれている。部屋の隅に大き目の台があり、その向こう側に二人の女性が居る。その台の上の大きな金属製の容器から、たまで何かを掬って、横に山積みされている、多分アルミ製であろう黄金色の器に入れて、ずらっと並んだ人々に順に渡している。その器一杯の食事が夕食のようだった。列の最後は、年齢は分らないが、多分若いであろうニグロの男性がついている。祐子もその男性の後ろに並んだ。男性は祐子をじろじろ見た。気が付くと、テーブルに着いて食事をしている者たちも、祐子を意識しているようで、食事の合間に祐子の方をちらり、ちらりと伺っているようである。小さな子供は居なかった。包帯を巻いた男性が10人ほど混じっている。食事は簡単に終わってしまうようで、皆十分満足がいつているようには見えない。食べ終えた食器とスプーンは奥の台の向こう側にいるもう一人の女性に返しているようだった。給仕している女性は必ず同じ言葉を言っているようだった。

「Hujambo! Habari zako?」（こんにちは、元気ですか?）

食事を貰っているものは、人によって応え方が違っている。大抵は

「Nzuri sana.」（元気よ）

と返答していた。食事を終えても、立ち上がらずに、祐子の方を見ていた3人の女性が何か話している。3人とも小麦色の肌をした若い女性のような。3人とも鼻は低い、愛嬌のある顔をしている。結婚しているかどうかは分らない。祐子の方をじろじろと見ていた。小柄で縮れ毛、顔が小さく、眼の大きな女性が、祐子と眼が合った時につこり笑った。口もそれほど大きくなく、目立たない。祐子に興味を持っているようだった。その前に座っている女性は少し猫背で、髪はブラウンのストレートである。やや丸顔で、眼はそれほど大きくないが、やや厚い唇をしている。3人目は顔が長く、やはり縮れ毛で、唇が少し飛び出した感じがする。3人の女性は祐子の動きを追っているようだった。やがて祐子が

食事を貰う番だった。

「Hujambo！」（こんにちは）

祐子は言った。

「わたしは、今日来たばかりで、何も分らないの。よろしくお願ひします」

日本語が通じるはずはない。

「Hili ni mchuzi wa samaki.」（これは魚のシチューよ）

そう言うと、給仕をしている女性は隣の女性から金属の器を受け取り、スープのようなものをなみなみとよそい、小皿に団子のようなもの一つとスプーンを載せて両方を渡してくれた。

「Hili ni ugali」（これはウガリよ）

「ありがとう」

「あ・り・がと？」

給仕の女性が真似をして言った。周りにいた女性があくすくすと笑った。

「決して、自分を馬鹿にしているのではない」祐子には、むしろ彼女たちが自分に対して親近感を抱いているように思えた。祐子にはにっこり微笑むと、二つの器を受け取って空いているテーブルの席を探した。先ほどの3人の女性の内のひとりが手を振った。祐子はその近くに行くと、もう一人の女性が他のテーブルから空いている椅子を持って来て、自分の横に置いた。祐子は言った。

「こんにちは。ここ、座ってもいいですか？」

「こ・こ、Hujambo！」（こんにちは）

椅子を持って来た女性が言った。二人の女性は笑った。

「こ・こ、Tafadhali、Kukaa chini.」（どうぞ、座って）

もう一人の女性が言った。祐子は頭を下げて椅子に腰掛けた。3人は交互に祐子に話し掛けた。

「Mnatoka wapi?」（どこから来たの？）

「Wewe ni Mchina?」（あなた、中国人？）

「Wewe ni nzuri.」（あなた、きれいね）

祐子には3人の話す言葉がさっぱり分らなかったが、微笑を返して懸命

に理解しようと努力した。椅子を持って来た女性が祐子の器を指差し、その指で祐子の口を指差した。祐子は食べるということだろうと思い、スプーンでシチューを掬って食べてみた。日本で食べるシチューより少し淡白な味だが、それほど違わない。斜め前に座っている女性が、団子を指差して、指でそれを摘むジェスチャーをし、それからシチューを指差した。祐子はなるほどと思った。周囲の人たちを注意して観ると、皆団子をシチューに浸けて食べている。団子は蕎麦掻のような、無味に近い味だ。これが主食なのだと思った。祐子は力が漲ってくるような感覚を覚えた。祐子が夕食を食べ終わると、隣の女性が食器を纏めて片付けている女性の方を指差した。祐子は食器を返却するのは分かっていたが、会釈して頷いた。祐子は3人の女性に軽く頭を下げると返却口に食器を持って行った。食器を返却し、ドアのほうに向かって歩いて行くと、またテーブルに座って食事をしている者たちの視線を一斉に受けてしまった。祐子は伏し目がちにしながらドアを引いて外に出た。先ほどの3人の女性が後をつけて来て言った。

「Jina langu Pipi.」(わたしはピピよ)

縮れ毛で、顔が小さく小柄で、眼の大きな女性だ。

「Jina Suzi.」(わたしはスージ)

顔が長く、縮れ毛で、唇が飛び出した女性だ。

「Jina Marise.」(わたしはマリゼ)

髪はブラウンで、丸顔で、厚い唇の女性だ。

3人がどうやら名前を言って自己紹介しているようだと思った。祐子も真似て言ってみた。

「ジナ ゆーこ」

どうやら通じたようだ。3人は喜んでいる。

「Yuko, rafiki!」(ゆーこ、友達ね)

祐子はにっこり笑って、右手を出した。3人も夫々右手を出した。祐子は一人一人と握手をした。3人はにこにこしながら祐子に向かって言った。

「Kwa heri!」 「Kwa heri!」

祐子は頭を下げた。3人の女性は人々の横たわっている部屋—祐子には病室にしか見えない大部屋に入ってしまった。

「クッヘリって、「お休み」かな？まだ早いな。「さよなら」かな。それとも、「又ね」かな？」

そう思うと、祐子は途端に嬉しくなった。友達が出来たような気がした。祐子は3人を見送っていたが、ふと脚を切断されて意識を失っていた少年のことを思い出した。祐子は直ぐに3人の後を追って病室に向かった。病室に入ると、少年は右奥の隅に先ほどと同じ姿勢のまま横たわっていた。祐子は少年に近付いた。少年の周囲には誰も居ない。切断された左足の腿に巻かれた包帯に血が滲み出ている。少年はまだ意識が戻っていないようだった。祐子は少年の横に寄り添って少年の顔を見つめた。あどけない顔だが、眉間には縦の皺が2筋通っていて、無意識なのに苦しそうな雰囲気漂わせている。

「Chungu. Chungu. . . . .」

少年が口を開いた。うわごとを繰り返している。

「Chungu. Chungu. Chungu. . . . Mama, Chungu.」

祐子は少年の縮れ毛の頭を撫でながら言った。

「痛いよね。苦しかったら、わたしの手を握りなさい。傍に居てあげるから。もう、大丈夫よ。大変だったのね」

少年は右手で祐子の差し出した左手を握り締めた。まだそれほど大きな手ではないのに、掌は祐子よりずっと硬く、爪は汚れ傷だらけだった。

「Mama, Mama . . . . .」

少年は眼を瞑っていたが、目尻に涙が光った。祐子は優しく頭を撫で、少年の手を軽く握り締めた。やがて、少年は寝息を立て始めた。祐子はそのまま少年の手を握っていた。ふと気付くと、先ほどの女性の一人が身体をこごめて覗いている。祐子の耳元で囁いた。マリゼだ。

「Juta ni yatima. Wazazi wake waliuawa.」(ジタは孤児よ。両親は殺されたの。)

祐子にはマリゼの言葉が全く理解できなかった。ただ、少年の名前は「ジュタ」らしいと思った。

「Hawezi kula kitu chochote.」(彼は何も食べないのよ)

祐子はこの少年の周りに、家族も兄弟も付き添っていないことから、この少年が何らかの理由で孤独な状態にあることを覚った。

「わたしが、近くに居てあげるわ」

祐子はマリゼに言った。マリゼには祐子の言葉は理解できない。首をかしげた。祐子は自分を指差してから、ジュタの傍の床を指差した。マリゼには祐子の言わんとすることが分ったようだった。

「Asante, Rafiki yako, Yuko」(ありがとう、やさしいのね、祐子)マリゼはジュタの包帯の様子を確認し、額に手を当てて熱があるかどうかを確認するような動作をしてから、その場を立ち去った。祐子は「マリゼは看護婦なのだろうか?」と思った。しかし白衣は着ていないし、ナースキャップも被っていない。私服で行動している。マリゼはジュタの元を離れると、次に通路を隔てて反対側の隅に横になっている年若い男性のもとに行った。男性に一言、二言話し掛けると、男性は横になっていた身体を起こした。マリゼが男性の背に手を当てて支えている。男性の額に手を当てて、また熱を調べているようだ。男性が何か喋った。マリゼは頷いて、男性が腰から下に掛けていた毛布を取り除けた。男性も右足が無かった。ジュタと同じような位置で切断されていた。やはり包帯を巻いてあったが、既に血は止まっているようで、包帯に血痕は無かった。祐子は視線を少年に戻した。少年は寝息を立てている。眼には涙を溜め、祐子の手をしっかりと握っている。

祐子はその日、一晩中ジュタの傍に居た。時々マリゼが来て、ジュタの額に触れ、包帯をチェックした。ジュタはずっと祐子の手を握っていた。夜中にマリゼが廻って来たとき、マリゼはジュタの腰付近に触れ、シーツを捲くった。ジュタはパンツを身に付けていない。黄色いさらしのような布を腰に巻き着けているだけだった。マリゼは排泄があったかどうか調べたようだった。腹は太鼓腹のように膨れているが手足は細い。祐子は栄養失調なのじゃないかと思った。マリゼが去ると祐子はいつしか眠りに落ちた。しかし、不思議なことに意識ははっきりしている。身体だけが眠っていた。時々ジュタが動くのが分った。朝まで、ジュタは尿

意を訴えもしなかった。祐子は、このままではジュタの回復はおぼつかないと思った。明日から、自分が食事を運んであげようと思った。祐子は一晩中不自然な体系を保っていたので、翌朝、腕と肩が痛かった。ジュタは祐子の手を離していた。祐子は立ち上がると、ころ伸びをし、手足を振ってみた。また、エネルギーが充満してくるのを感じた。祐子は朝の身だしなみを調えるため、隣の部屋に向かった。そこは洗面所である。祐子は口を濯ぎ、顔を洗い、手を洗った。汗ばんだ身体を綺麗にする術は無かった。その隣の部屋はトイレだった。トイレに寄ってから、祐子は一旦ジュタのところに戻った。ジュタが弱っていることは、見た目にもはっきり分った。祐子がジュタの側にしゃがんでいると、病室のあちこちから、何人かの男女が立ち上がって通路を早足に歩き始めた。食事の時間だった。祐子はジュタの頭を撫で、手を握り締めて言った。「今朝の食事を持ってくるからね、待っていてね」

祐子は通路に出て食堂まで行き、扉を開けた。既に大勢の人たちが列を成していた。祐子も並んだ。前に並んでいた30歳前後のラッキョウのような頭をした男が言った。

「Wapi wametoka?」(どこから来たの?)

「わたしは、言葉が分りません」

男は、言葉が通じないと分ると、諦めて振り向いてしまった。ピピが入って来て、祐子の後に附いた。

「Habari ya asubuhi」(おはようございます)

「おはようございます」

祐子にも、「おはよう」という言葉の雰囲気分った。

「Yuko, Jana wewe kulala?」(祐子、昨日は眠れた?)

祐子は、意味が分らない。ただ微笑みを返した。ピピが右手を口元に持ってゆき、人差し指と親指を合わせて、前に向かって広げる動作をした。話すことを言っているようだ。そして、自分を指差してから祐子を指差し、また、その逆に祐子を指差してから自分を指差して、ペンを持って字を書く格好をしながら言った。

「Nitawaambieni baada ya Hisuwari. Badala yake, Tafadhali



tueleze lugha ya nchi yako.」(わたしがスワヒリ語を教えます。その代わり、あなたの国の言葉を教えてください。)

言葉を教え合おうという、意味だということが分った。

「はい、分かりました。よろしくお願いします」

祐子は頷きながら言った。ピピは嬉しそうだった。やがて祐子が食事を貰う番になった。昨日の給仕係と同じ女性だった。

「Habari ya asubuhi」(おはようございます。)

「ハバリヤ アスブヒ」

祐子も真似をした。通じたようで、給仕係は微笑んだ。昨晚と同じ食事だった。祐子は1人前貰うと、病室の方を指差して言った。

「ジュタの分をください。ジュタの分を！」

給仕係りは、分らないようだった。ピピも首をかしげた。その時、ドアを開けて、マリゼが入って来た。祐子が何度も「ジュタの分」と言っているのを見て、給仕係の傍に来ると言った。

「Tafadhali kutoa yake chakula na subira 」(彼女に患者の食事を上げて)

「Okay」(わかりました)

給仕の女性は直ぐに了解して、もう1人前をトレイに乗せて祐子に渡した。

祐子は手に持っている自分の分もトレイに載せてから頭を下げた。

「ありがとう」

給仕係は微笑んだ。祐子とピピとマリゼの3人は中ほどの空いているテーブルで一緒に食事をした。祐子はマリゼにも「ありがとう」と言った。マリゼは改めて

「Habari ya asubuhi, Yuko.」(おはようございます、祐子。)

と言った。祐子も「ハバリヤ アスブヒ」と返した。

「二人の女性は祐子にいろいろ聞きたいようだったが、何しろ言葉が全く通じない。ピピがマリゼに言った。

「I'll kufundisha maneno Yuko.」(わたし祐子に言葉を教えるわ。)

「Oh, kwamba ni wazo nzuri.」(それは名案だわね。)

3人での食事が済むと、祐子はジュタの食事を持って病室に戻った。ずっと眼を閉じていたジュタが、弱弱しくそっと眼を開いた。

「ジュタ、食事を貰ってきたわ。わたしが給仕してあげるから、食べるのよ」

ジュタがほんの少し微笑んだように祐子には思えた。祐子はトレイをジュタの枕元に置いて、ジュタの手を握り頭を撫でてから、スプーンでシチューを少し掬うとジュタの口に持って行った。ジュタは弱弱しく、それでも必死に口を開いている。スプーン1杯のシチューはジュタの口に吸い込まれるように流れ込んだ。

「そうよ、その調子。美味しいでしょう」

もう1杯、スプーンにシチューを掬い、ジュタに与えた。ジュタに食べる元気が出てきたようだった。ジュタは涙を流した。身体を動かしたとき痛みが走ったようだった。

「Mama, Chungu. . . . Mama, Ladha.」

ジュタは祐子がママでないことは百も承知していた。しかし、ジュタにとって祐子はママに違いなかった。だから祐子のことをママと呼んだ。その日も祐子は一日中ジュタに付き添って面倒を見た。ジュタははっきりと元気を取り戻してきた。祐子が近くに居ると嬉しそうだった。祐子がトイレに行ったり、部屋に戻ったり、少しでもいなくなると非常に寂しかった。祐子はできるだけジュタの近くに居るように努めた。ジュタは食事を食べられるようになってから3日目に、身体を起こすことができるようになった。祐子はその時になって初めて、ジュタが脚を切断されただけでなく、全身に酷い打撲を受けていたことを知った。起き上がったジュタの頭を胸に抱き締めて祐子は言った。

「よく頑張ったわね。おりこうね」

ジュタは眼のクリッとした可愛い顔の少年だった。マリゼがジュタは7歳だと言った。日本では小学校2年生である。傷を負って、その苦しきから逃れる為に母親に甘えたかった。しかし、その甘えを持ってゆく相手が無かった。祐子が現われて母親を得たのだった。次の日からスージがやって来て、ジュタの歩行訓練を行い始めた。歩行訓練とは言っても、

日本の病院のようにリハビリの器具が揃っているわけではない。スージがジュタを抱き起こし肩を貸して、少しずつ片足と杖での歩行の練習をさせるのだった。ジュタは程なく、スージかマリゼの助けを借りてトイレに行くことができるようになった。そのこともジュタにとって閉塞感からの開放に繋がった。それまでは、尿も便も専用の便器に取り、マリゼや祐子が処理をしていた。ジュタはそれが嫌でたまらないようだった。歩行訓練を受けるようになってから、ジュタは普通の子供の明るさを取り戻しつつあった。ジュタが歩行訓練を始めた日からピピが夕方になると祐子の所にやって来て、簡単な単語を教え始めた。マリゼとスージも時々一緒に来た。しかし、マリゼもスージも結婚していて、家に子供を残して働いていたため、そう長い時間祐子のところに留まることはできなかった。子供たちの面倒は母親が見ているようだった。ピピは独身だった。マリゼとスージと一緒に来るときは、彼女たちの教える単語の語彙がバリエーションに富んでいて、祐子には少しく難しく感じられたが、楽しさは倍増した。祐子がこの施設に連れて来られて1週間が過ぎた日の昼に、マリー・ジュベステルが一人の男性を連れて、祐子のところにやって来た。祐子はジュタの歩行訓練をしていた。

「Have you got used to be living here, Yuko?」（祐子、ここの生活に慣れたかしら？）

祐子はただ黙って頷いた。

「This gentleman is your master, Yuko. You must make submission to him.」（祐子、この方がご主人様よ。あなたはこの方に服従しなくてはいけないのよ）

その男は45歳ほどの背の高い、体格の良い黒人だった。顔色はブラウンで髪は縮れ毛を刈り込んである。ネクタイを締め、一見紳士風に見える。

「Hello! Nice to meet you, Yuko.」（やあ、始めまして、祐子）

祐子は黙って立っていた。まだ意識を切るのは止めた。この男がどういふ人間か見極める為に暫らく意識を研ぎ澄ませていようと思った。祐子はただじっと男の顔を凝視していた。

“I apologize you that we have forced you to be brought here.”(貴女を無理やり連れて来てしまって、許してください。)

祐子は男の話すことは理解できた。それでも、一言も口にせずただ黙って立っていた。マリーが言った。

「ご主人様は、あなたを無理やり連れてきた、だから謝っている」

祐子はその言葉を聞いても、黙っていた。何と弁解しようと、このような行為が正当化されるはずは無い。こういう行為の影響でどれほど多くの人が苦しい思いをしたことか知れなかった。

「あなたは、この方の奴隷よ。この方に絶対服従するのよ。いいわね」

“I need your help to save life of many people fighting and working here. We Buti are under the battle here against Kutu people. In the history of our country, Uganda had been harmonious, rich and beautiful country, before European people came here to get mineral like tungsten or tin and some plants like coffee or tea. They have rushed to cope with other country. They handled our people to fight each other for grabbing the right of natural resource in our country. More than one million Buti people have been killed. Nowadays, we have to straggle to survive in the desolated land and to keep life from attach of Kutu.”(ここで戦い、働いている大勢の人たちの命を守る為に、あなたの助けが必要なんだ。我々はクツ族と戦闘状態にある。この国の歴史を見ると、ヨーロッパ人がタングステン、錫などの鉱物やコーヒー、お茶などの植物を求めてここに来るまでは、ウガンダは調和の取れた、豊かで美しい国だった。彼らは我々をお互いに戦わせて、我々の国の資源を手に入れようとした。既に100万人以上のブチの人たちが殺されたんだ。いま、我々は荒廃した土地で生き延び、クツからの攻撃から命を守るために苦悶している)

祐子はそれを聞いて、初めて口を開いた。

「わたしは、自分の意思でここに来たのではありません。でも、あなた方がわたしを必要としているのでしたら、わたしはここで、人々を救うために働きます」

マリーは祐子が男の話を理解していることを知って、口を出さなかった。男は祐子に握手を求めて言った。

“My name is Barack Tugunsho. I genuinely thank you. You would understand my mind. Will you live with us till our dying day.”(わたくしの名前はバラック・ツグンショウです。本当にありがとうございます。あなたはわたしの心を理解された。我々と生き抜いてくださいますか?)

祐子はバラックの手を握り返して、英語で答えた。

“Yes, I will.” (はい、そうします。)

祐子はここで死んでもいいと思った。あまりに悲惨な人々を見た。自分はここに来る為に生まれて来たような気がした。昼食の時間になると、バラックとマリーは祐子と一緒に食事をしようと言った。祐子は頷いた。祐子はジュタの頭を撫でてからその場を離れた。ジュタはもう、一人で居ることにも耐えられるようになっていた。ジュタの食事はスージが担当していた。この日は食堂に向かって駆け出してゆく者はいない。皆、バラックとマリーを意識しているようで、硬い雰囲気は漂っていた。給仕係も緊張しているのが直ぐに分った。いつもの会釈も挨拶も無い。ただ黙々と給仕をしていた。3人は奥のテーブルに着いた。食事をテーブルの上に置くとバラックが祐子に向かって言った。

“Why didn't you reproach me about my felony?”(なぜ、僕の犯罪を責めなかったんですか?)

祐子は意味が分らなかった。マリーの方を伺うと、マリーが説明した。

「彼は、あなた、なぜ、犯罪行為を責めなかったか聞いている」

「わたしは人を責めることはしません。もう、済んだことです」

マリーが訳した。

“She said she never blame other person, because, it has already passed.” (彼女は「決して他の人を責めない、なぜなら、それは済んでしまったことだから」と言いました。)

祐子が辺りに意識を振ると、入り口付近のテーブルでピピとマリゼと一緒に食事をしていた。彼女たちは祐子たちを意識しているようだったが、

やはり、バラックとマリーを気にしているのか、あまり直接視線を向けることはしなかった。バラックがマリーに話し掛けた。

「Mara moja, Yeye anakuwa na muuguz.」(当分、彼女は看護婦になつてもらう)

「Yeye tu inachukua huduma wa wagonjwa?」(病人の世話をするだけですか?)

「Ndiyo.」(そうだ)

「Sawa.」(わかりました)

マリーが祐子に向かって言った。

「あなた、暫らくの間、看護婦になる。いいね」

3人が食事を終えると、バラックが祐子の部屋を確認してみたいと言った。部屋を見て、バラックはマリーに言った。

「Give her another room, bigger one. She needs a sink and a writing table. And give her some wear to go outside with me.」(彼女に別のもっと大きな部屋を用意しなさい。洗面台と机が必要だ。そして、わたしと一緒に外出する為の服を2, 3着与えなさい。)

マリーは少し怪訝な顔をしたが、直ぐに了解した。祐子の部屋を見るとバラックはマリーを連れてそのまま帰って行った。祐子は、バラックが正常な意識を持った人間であったことに胸を撫で下ろした。祐子が病室に戻りジュタの面倒を見ていると、直ぐにマリーが戻って来た。マリーは祐子に附いて来るように言った。新しい部屋だった。その部屋は病室から最も離れた突き当りの部屋だった。中に入って祐子は驚いた。壁には綺麗な装飾が施されていた。そこには綺麗なベッドがあり、狭いが洗面台とシャワールームもあった。ベッドサイドに小机と椅子が置かれていて、その机の上に少し大きめの窓が付いていた。衣類を入れる小さなチェストも用意されている。まるでホテルの部屋のようなだった。驚いている祐子に対してマリーが言った。

「今日から、あなたの部屋ここ。ご主人様言った。ここ一番良い部屋。ご主人様、あなた抱く。あなた、ご主人様の奴隷。そして、看護婦」  
祐子は「やはり、そうか」と思った。しかし、何も応えなかった。

「洋服、チェストの中。5枚ある。下着もある」

祐子には何も怖いものは無かった。黒人の男に抱かれることは、ここに来たときから覚悟をしていた。祐子は黙って頷いた。

その日の午後から祐子は看護婦としての仕事を始めた。まるで病室のようだと思っていた部屋はやはり病室だった。マリーがナースルームに祐子を連れて行った。そこは祐子の部屋のある方向とは逆の病室への入り口付近にあった。祐子が初めてここに連れて来られたときに通り過ぎた部屋だった。その時は気付かなかったが、入り口から入って直ぐ右手のドアに「Ofisi wauguzi」と書かれた札が掛かっていた。祐子には意味が分らなかったが、マリーがその札を指差して「Nurse Room」と言ったので、そこが看護婦室だと分った。マリーの後に附いて中に入ると、5人の女性達が忙しそうに立ち働いていた。その中にマリゼが居た。マリゼは祐子に気付かなかったが、マリーが全員に声を掛けた。

「Kila mtu, mimi kukusanya. Yeye Yuko. Yeye ni leo, na rafiki wa kila mtu. Tafadhali kufundisha kazi」(皆、集まって。彼女は祐子。今日から、みんなの仲間です。仕事を教えてあげてくださいね。)

マリゼが振り返って手を振った。祐子はマリゼに会釈した。マリーが話し終わると、そこに居た女性たちが寄り集まって来た。皆、30歳前後の女性だった。祐子には見覚えのある顔もあった。女性たちは全員祐子のことを見知っているようだった。祐子は頭を下げた。

「始めまして」

マリーがそれを通訳した。

「Nice kukutana na wewe」(はじめまして)

「わたしは祐子と申します」

「Jina langu ni Yuko.」(わたしは祐子です)

「いろいろ教えてください」

「Tafadhali kazi mawazo.」(仕事を教えてください)

それから、5人が順に自己紹介をした。マリーが看護婦はあと3人いるが、病室に出ているはずだと言った。祐子は必死に5人の名前と顔を覚えようと努めたが、覚えられたかどうか自信は無かった。

祐子のそれからの毎日は看護婦としての生活だった。患者を看病したり、見廻ったりするのが日課だった。巡回の間に何度もジュタのところを訪れて頭を撫でてあげた。ジュタは祐子の顔を見ると途端に明るい顔になった。仕事を終わると毎晩ピピが祐子の部屋を訪れて単語を教えた。他にすることは無かったので、祐子は一月もすると、片言ながらスワヒリ語を話せるようになった。生活するのに、大きな不自由を感じなくなった。ピピは「この国ではフランス語、英語、キンヤルワンダ語が公用語だが、他の地域の人とのやりとりがあるので、このキャンプではスワヒリ語を使うことになっている」と言った。「スワヒリ語は、誰でも使える訳じゃないけど、ほとんどの人が話せる」とも言った。祐子はここで生きてゆく自信が付いてきているのを感じていた。1か月の間、バラックは一度も祐子の部屋を訪れることは無かった。マリーは週に1度、病室にやって来たが、祐子の部屋に寄ることはなく、祐子とはナースルームで近況を聞く程度の会話しか交さなかった。設備こそ整っていなかったが、重病の怪我人も居て、そこは日本の普通の病院と何ら変わらない業務をこなしていた。看護婦たちは皆親切で、祐子に看護の仕方を丁寧に教えてくれた。ただ、そこには一人の医師も居なかった。そして、何度も薬品が足りなくなって大騒ぎになり、マリーに連絡を取って、緊急配送をしてもらった。人々の暖かさや優しさを感じ、祐子は「ここが、本当に紛争地域なのだろうか」と疑問に感じる事がたびたびあったが、足を切断されたり、身体の中に弾丸が残っている患者などを診ると、その悲惨さからここが尋常な場所ではないことを思い返すのだった。特に夜勤の当番の時は、部屋に4つある電球だけでは十分明るいとは言えず、そろりそろりと人々の間を歩いていると、時々うめき声かして背筋を冷たいものが走ることもしばしばあった。しかし、それは人の苦しんでいる声で、恐怖とは違い戦慄に近い感覚だった。夜勤の無い日は、祐子は就寝前に必ず賢と亜希子に意識を向けて、ふたりが無事に過ごしていることを祈り、更に数馬と亮子の結婚式が迫っていることを思い、ふたりの幸せを祈った。そして、毎日、自分が担当した人たちが快方に向かうことを祈った。不思議に亜希子に対する嫉妬心は湧かなかつた。ある朝、



目覚めたとき、祐子は机の上に変わったものがあるのに気付いた。良く見るとそれはボールだった。そのボールには見覚えがあった。祐子は直ぐに思い出した。ゆきの家を訪れたときに太郎と信次が遊んでいたボールに似ていた。殺風景な部屋にボールが自分の存在をアピールしてでもいるかのように目立って見えた。

「何故、こんなボールがここにあるのかしら？・・・誰かが送ってよこしたのかしら？それとも誰かが忘れていったのかしら？・・・だとすると何の為に持って来たのかしら？」

祐子は自問自答してみたが結論を出すには至らなかった。結局「まあ、これも飾りになっていいか」と妥協してしまった。祐子はボールが机の上から落ちないように、ちり紙を折って敷き紙を作り、ボールの下に敷いた。その日の業務が終えて部屋に戻ると、ボールは元のまま敷き紙の上に乗っていた。祐子はボールに話し掛けてみた。

「あなた、なぜ、ここに来たの？」

ボールがピンク色に変わった。祐子は驚いた。当（まさ）にあのボールだと思った。

「皆元気かしら、あなた、知っている？」

ボールはオレンジ色に変わった。祐子は、「みんな元気にしているんだ」と思い、無性に賢に会いたくなった。

「あなた、プロジェクトは順調に行っているの？もう、わたしのことは忘れたかしら？」

そう話しかけると、ボールが赤と白を交互に点滅しているように反応した。

「不思議なボールね。わたしの友達になってくれそうね。でも、一寸大きすぎるかしら。もう少し小さいといつもポケットに入れておけるんだけど」

そう話しかけると、ボールは見る見る小さくなって、直径5センチくらいになった。

「凄いわ。あなた、いつもわたしと一緒に居てね」

祐子がそう言うと、ボールはテーブルの上に浮き上がり、祐子の目の前

に飛んできた。いや、飛んで来たというより、一瞬にして祐子の目の前に移動したと言った方が正しいかもしれない。祐子は目の前に浮かんでいるボールを掴むとそれをワンピースのポケットに入れた。

「あなた、そこに居てね。あなたはあの人の代わりよ。あなたって呼ぶわね」

その時、ドアをノックする音がしてピピが入って来た。祐子は就寝時までドアをロックしない。ピピが言った。

「Yuko, Habari ya jioni」(祐子、こんばんは)

「Habari ya jioni, Pipi」(こんばんは、ピピ)

祐子も応えた。

「Yuko, Sisi utafiti Mazungumzo ya kila siku Leo.」(祐子、今日は日常会話を勉強しましょう。)

勿論祐子には、何を話しているのか分らない。ただ、会釈で応えた。ピピは祐子の近くに来ると椅子に腰掛けた。いつもピピが椅子に腰掛け、祐子がベッドに腰掛けて勉強をした。ピピが10個の単語を祐子に教えると、祐子はピピに1つ日本語の単語を教えた。大抵はピピがジェスチャーをして対象となるものを示してから、言葉を教えたが、時にはジェスチャーでは祐子に単語の対象を想起させることができず、紙に絵を書いてそれを示すこともあった。それでもまだ、単語は対象を示すのが容易だったが、日常生活の会話はその意味を伝えることが難しかった。挨拶の言葉を教えた時、ピピはジェスチャーと絵を駆使して、意味を伝えた。「ありがとう」を教えた時は、先ず頭を下げて、次に「Asante」と良いながら、両手で合掌した。祐子はそれを見て直ぐに理解した。「こんにちは」を教えるときは、先ず頭を下げて、次に紙に太陽の絵を書き、「Hello」と言った。祐子は英語と同じなので、直ぐに「Hello, Pipi」と言い返した。ピピは手を叩いて嬉しかった。

「Good, Yuko, good. OK, Ijaye, Habari ya asubuhi.」(いいわ、祐子、上手。それじゃ、次は、おはよう)

と言って持参したノートを開き、山に太陽が掛かった絵を描いた。祐子はそれも理解した。「Habari ya asubuhi.」祐子は繰り返した。ピピは

いつもその日に教える言葉をノートに書いて来ていた。祐子はピピが帰った後で、ピピの置いていったノートの切れ端を見て、何度も反復してその日の単語を覚えた。

この日は「ごめんなさい」「おねがいします」「元気ですか?」「おなか  
が空いた」「頭が痛い」「彼は負傷した」「彼女は死んだ」「わたしは悲しい」「わたしは嬉しい」「貸してください」を教えてもらった。「ごめんなさい」「元気ですか?」「わたしは嬉しい」の3つのフレーズは祐子  
がそのフレーズを理解するまでに時間が掛かった。特に「元気ですか?」  
と「貸してください」はなかなか確認できずに、ピピはとうとう一番最後に教えることにして、飛ばした。ピピは3コマ漫画を描いて「元気ですか?」  
と「貸してください」をやっと祐子に確認させることに成功した。一旦フレーズを確認してから、文章を覚えなければならない。ピピは忍耐強かった。祐子が分らないと言っても、腐らずに何度も何度も説明してくれた。ピピは漸く10個のフレーズを祐子に教え終えた。およそ2時間掛かった。祐子はコップに水を汲んで来て、ピピに渡した。

「Pipi, asante sana. Ijayo, I kufundisha Kijapani wewe.」(びび、ありがとう。今度は、わたしがあなたに日本語を教えるわ)

祐子はピピのノートの端に桜の絵を書いた。ピピは首を傾げた。祐子は言った。

「Hii ni maua. Maua Sakura」(これは花よ。桜の花)

「Sakura?」(さくら?)

祐子は桜を教えることで、日本を教えられると思った。祐子は絵を使って必死に教えた。ピピはやっとのことでそれが木に咲く花であることを理解した。今では日本の地図もピピは理解していた。祐子はノートに日本の地図を描き、そこに桜の花の絵を一杯書き付けた。春になると、日本中が桜の花で一杯になると説明したかった。美しいということは理解されたが、日本中が桜で一杯になることをピピがどの程度理解したか、自信がなかった。しかし、ピピは言った。

「Nataka kwenda Japan. Mimi nataka kuona Sakura.」(日本に行きたい。桜を見たいわ。)

祐子はピピの言っていることが理解できた。言葉より、感情を理解した。祐子がノートを置いて、ベッドの上にドカッと座ったとき、ボールがポケットから飛び出して、ベッドの上に落ちた。ボールはピンク色をしている。それを見たピピが言った。

「Yuko, Yake ni nzuri. Naomba kukopa na nini?」（祐子、それ綺麗。それ、貸してくれない？）

祐子は、さっき教えてもらった会話だったので、直ぐに分った。ボールは賢の代わりなので少し躊躇したが、直ぐに了解した。

「OK」

「直ぐに返してね」と言いたかったが言葉が分からなく、話せなかった。祐子は「いずれ帰ってくるだろう」と思った。ピピはボールを手にとると、嬉しそうに帰って行った。祐子を、寂しさに似た感情が過（よぎ）った。

次の日も、次の日も、ピピはボールを持たずに祐子の部屋を訪れた。祐子はピピが返してくれるのを黙って待つことにした。ピピはボールを持たずに祐子を訪れ続けた。1週間が経った日、祐子はピピが帰った後で、賢と亜希子を思い起こし、心の中で話し掛けた。ふたりに対する想いが募ってきて涙が流れた。眼を閉じて瞑想し、ゆっくり眼を開けると祐子のポケットが盛り上がっている。触れてみるとボールだった。祐子は驚いた。ボールは信次の言っていた通り、不意に出没することが分った。翌朝、病室の通路でピピに会うと、祐子は直ぐにボールを見せて言った。

「Pipi, habari ya asubuhi. Hii ni akarudi kwangu.」（ピピ、おはよう。これ返してもらわね）

ピピの顔が強張った。口をキッと結ぶと、黙って看護婦室の方に行ってしまった。その日は時々会うことがあっても、ピピは祐子を見ると顔を背けて、逃げるようにしてそこから去ってしまった。祐子はボールのことをピピにどう説明したら良いか考えた。ボールの不思議な挙動は、すべての人に認識されるわけではない。多分、ピピにとってはただの綺麗なボールに違いなかった。態度が変化したのはピピだけではなかった。スージもマリゼも急に祐子に対して冷たくなった。行き交っても、顔を

合わせない様にしている様だった。祐子は仕事を終えてから何とか説明して分かってもらおうと思った。昼少し前にバラックとマリーがやって来た。看護室に全員が集められ、医薬品の支給の話と新しい任務の説明をした。マリーが全員に説明しているときは理解できなかったが、祐子だけ後でマリーから英語で説明を受けてやっと分った。最近のブチ族に不穏な動きが見られるということだった。ここから100キロ離れた村が襲われて、クツ族の男がほとんど殺されたとマリーは説明した。急遽、そこからの病人が搬入されると思われるので、現在の2シフトを3シフトに切り替えて、休息時間を短縮するとのことだった。それが新しい任務だった。皆真剣に聞いていた。マリーは言った。

「We should be together. We must help each other.」（わたしたちは一緒よ。お互いに助け合わなくては駄目よ。）